

学内六報

2020.4.22

no. 1533



規模を縮小した卒業式で告辞を述べる五神総長（3月24日）



志ある卓越。  東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

令和2年度役員等の紹介
令和元年度卒業式・学位記授与式
令和2年度入学者へのメッセージ

令和2年度役員等の紹介

令和2年度役員等を以下のとおり紹介します。

総長

(任期)平成27年4月1日～令和3年3月31日

五神 真

理事・副学長

福田 裕穂

(担当)総務、入試・高大接続、評価

宮園 浩平

(担当)研究、懲戒

藤井 輝夫

(担当)財務、社会連携・産学官協創

大久保 達也

(担当)教育、学生支援、施設

白波瀬 佐和子

(担当)国際、総長ビジョン広報

理事

境田 正樹

(担当)コンプライアンス、監査、病院

里見 朋香

(担当)事務組織、法務、人事労務

監事

澤井 憲子

服部 彰

大学執行役・副学長

相原 博昭

(担当)学術長期戦略、グローバルキャンパス

有信 陸弘

(担当)研究倫理

熊野 純彦

(担当)図書館

佐藤 健二

(担当)人文社会科学資産活用戦略

羽田 正

(担当)国際求心力強化

松木 則夫

(担当)ダイバーシティ

光石 衛

(担当)環境安全

森山 工

(担当)人文社会科学振興

渡部 俊也

(担当)産学連携

副学長

相田 仁

(担当)キャンパスデジタル化

浅見 泰司

(担当)オンライン教育

岡部 徹

(担当)渉外・産学協創

坂田 一郎

(担当)経営企画、企画調整

関村 直人

(担当)国際、日本語教育

武田 洋幸

(担当)入試改革、広報改革

津田 敦

(担当)地域連携、渉外・卒業生、復興支援

吉村 忍

(担当)産学協創振興

副理事

稲垣 博明

(担当)協創活動企画調整、イノベーション
コリドー

奥抜 義弘

(担当)広報戦略、危機管理・情報共有、業務改
革推進・普及、研究倫理、研究費・研究不
正対応

梶 正治

(担当)女性活躍推進、ダイバーシティ、働き方
改革

鈴木 敏人

(担当)柏地区整備、柏地区事務機構長

戸張 勝之

(担当)経理・調達

平野 浩之

(担当)財務制度改革、資金・資産運用

山本 貴史

(担当)SDGs・社会実装

総長室顧問

杉山 健一

ステファン ノレーン

山田 興一

総長特別参与

沖 大幹

(担当)国際協力

喜連川 優

(担当)デジタルデータ活用

橋本 和仁

(担当)科学技術制度

藤原 帰一

(担当)国際関係

総長特任補佐

有馬 孝尚

(担当)IR(総括・研究)、イノベーションコリドー

大竹 暁

(担当)未来社会協創政策

大日方 隆

(担当)IR(管理運営)

小山 博史

(担当)IR(社会連携)

川崎 雅司

(担当)研究力強化

佐藤 薫

(担当)グローバルコモンズ、総務補佐

佐藤 仁

(担当)国際広報、総務補佐

高橋 浩之

(担当)産学連携推進

出口 敦

(担当)柏地区整備

中村 宏

(担当)情報基盤整備

難波 成任

(担当)EMP

林 香里

(担当)国際関係、男女参画

松田 恭幸

(担当)IR(教務)

矢口 祐人

(担当)学部教育国際化

山嵜 達也

(担当)病院・施設関係

渡邊 聡

(担当)国際関係

中尾 彰宏

(担当)産学協創、次世代通信技術活用

割澤 伸一

(担当)産学協創、スポーツ先端科学研究



新役員等の略歴と就任の挨拶

新理事・副学長、新副学長の略歴および就任の挨拶を以下のとおり掲載します。

東京大学の未来に向けて

この度、理事・副学長を拝命いたしました。教育、学生支援、施設、情報システム等を担当いたします。新型コロナウイルス感染拡大の最中の着任となりました。感染拡大により、人類は三つの危機に直面しています。生命の危機、経済の危機、そして未来の危機です。未来を担うのは若者です。学生に責任を負う大学において、私が担当する任務の重要性を再認識し、着任日を迎えました。

人類の長い歴史の中、我々は大きな変化のときを迎えています。人類の活動が拡大する中、地球の有限性が顕在化し、それに伴う持続可能な社会の構築が国際的な共通課題になっています。また、東アジアを中心に少子高齢化が進行、我が国はいち早くその課題に直面しています。加えて、ポストコロナの時代には、今ま

では異なる様々な制約を受け入れていかねばならないと考えます。今こそ、本学の出番です。本学はあらゆる分野の知のエキスパートが所属する、世界でも有数の大学です。本学の知を集集し、世界にビジョンを発信し、イノベーションを創出していきましょう。

三月までの三年間、工学系研究科長・工学部長をつとめ、様々な課題に取り組んで参りました。これらの取り組みの中から、答えは現場にあること、構成員が所属や属性を越えて縦横無尽に協調・連携することが重要であることを学びました。

この経験をいかし、東京大学の未来に向けて、One Team “UTokyo” の一員として全力で取り組む所存です。何卒、よろしくお願い申し上げます。

理事・副学長

大久保達也

OKUBO Tatsuya



1983年3月 本学工学部化学工学科卒業
1985年3月 本学工学系研究科化学工学専攻修士課程修了
1988年3月 本学工学系研究科化学工学専攻博士課程修了、工学博士
1988年4月 九州大学工学部助手
1991年3月 本学工学部助手
1993年6月 米国カリフォルニア工科大学客員研究員
1994年8月 本学工学部講師
1997年10月 本学工学系研究科助教授
2006年4月 本学工学系研究科教授
2012年4月 本学「プラチナ社会」総括寄付講座教授、本学総長補佐
2014年4月 本学教育研究評議員、工学系研究科副研究科長
2017年4月 本学工学系研究科研究科長・工学部長
専門分野：化学工学、ナノ材料化学、プラチナ社会
研究内容：1) Koki Muraoka, Yuki Sada, Daiki Miyazaki, Watcharop Chaikittisilp, and Tatsuya Okubo, "Linking Synthesis and Structure Descriptors from a Large Collection of Synthetic Records of Zeolite Materials." *Nature communications* 10 (2019):4459. 2) Keiji Itabashi, Yoshihiro Kamimura, Kenta Iyoki, Atsushi Shimojima, and Tatsuya Okubo, "A Working Hypothesis for Broadening Framework Types of Zeolites in Seed-Assisted Synthesis without Organic Structure-Directing Agent." *Journal of the American Chemical Society* 134 (2012): 11542-49.
趣味：酒と旅

公共セクターの新しい支え方のモデルづくり

このたび、経営企画と企画調整担当の副学長を拝命しました。これまで総長特任補佐として、東京大学ビジョン2020、指定国立大学構想調査、未来社会協創推進本部（FSI）の設立等に携わらせていただきましたが、これら一連の改革への取組により、東京大学のマネジメントは「運営」から「経営」へとその性格を大きく変化させました。また、この新しい経営体制の下、本学は、従来の活動の枠を超え、より良い未来社会に向けた社会変革を駆動することを志して活動してきました。社会と向き合うこの新たな大学像は、各界から大きな共感を得つつあると感じています。

次のステージにおいては、公共的役割を従来よりも幅広く、かつ、大規模に担える大学の経

営モデルを確立することが重要な課題です。これには、多様なステークホルダーによって活動基盤が支えられる仕組み、学問の時間軸の多様性等を考慮しつつ中長期的な視野を持って先行投資を行う仕組み、先進的なビジョンを社会と協創していく仕組み等を構築することが必要となります。こうした経営モデルは、知識集約型社会へと移行する中での公共財の新しい支え方を示すものであり、大学のみならず、公共サービスを担う多様な経営体の今後のあり方にも影響を与えるものと考えられます。

微力ではありますが、UTokyo 3.0時代に入った東京大学を支える持続可能な仕組みづくりに少しでも貢献できればと思います。皆様のご指導をよろしくお願い致します。

副学長

坂田一郎

SAKATA Ichiro



平成元年3月 本学経済学部卒業
平成9年5月 ブランダイス大学国際経済・金融学大学院修士課程修了
平成15年11月 本学より博士号（工学）学位取得
平成20年8月 本学政策ビジョン研究センター教授
平成25年7月 本学工学系研究科教授
平成26年4月 本学政策ビジョン研究センター長兼務
平成27年4月 本学総長特任補佐
専門分野：技術経営、計量書誌学
研究内容：1) Asatani, K., Takeda, H., Yamano, H., and Sakata, I. "Scientific Attention to Sustainability and SDGs: Meta-Analysis of Academic Papers." *Energies* 13, no.4 (2020): 1-21. 2) Kose, T. and Sakata, I. "Identifying Technology Convergence in the Field of Robotics Research." *Technological Forecasting and Social Change* 146 (2019): 751-766.
趣味：古代史、旅行

東京大学のデジタル変革

キャンパスデジタル化担当の副学長を拝命しました工学系研究科の相田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

最近、DX (Digital Transformation : デジタル変革) という言葉がよく聞かれるようになりました。以前からペーパーレス化という言葉はよく使われましたが、それは紙の書類を電子化するだけで、仕事のやり方はそのままであることが多かったのに対して、DXは、「企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること」とされています。

より良い大学のオンライン教育を目指して

このたびオンライン教育担当の副学長を拝命いたしました。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、東京大学全体での主な教育手段がオンライン教育に急変してしまいました。教育機能は大学の要であり、どのような形であれ高等教育を遂行し、社会に貢献する貴重な人材を育て上げねばなりません。これをオンライン教育という手段で円滑に進め、学生の皆さんの学びの質を高めていくことが使命です。さらに、オンライン教育の経験を踏まえて、今後の理想的な教育システムとなるよう教育改革を推し進め、オンライン教育をその中に位置づけていかねばなりません。

これまで私は、住環境評価や都市や不動産政

策の効果分析を行ってきました。その研究に基づく知見を活かして、実際の都市計画や不動産制度に関わる社会制度改革のお手伝いもしてきました。教育の仕組みの改革も、社会制度の改革と似ています。既存の制度にはその役割があり、それによる利点も多々あります。制度改革はそれにメスを入れる行為であり、当然に社会への負担も高まります。ただ、世の中の進化や環境の変化に取り残されることで、より大きな負担を社会に強いてしまうことを未然に防がねばなりません。教育の仕組みも同じです。今回の大きな試練をむしろ奇貨として、大学の教育の高度化につなげていきたいと考えております。少しでも東京大学の教育改革に貢献できれば幸いです。

東京大学をさらにビジブルに

このたび広報および入試改革担当の副学長、広報戦略本部長を拝命致しました。本部の広報は、広報戦略2020 (2017年策定) に従って、大学の顔とも言うべきHPのリニューアル、シリーズとなった研究者とその研究を伝える記事、英文プレスリリースの充実、等々、着実に進化しています。しかし現状に満足することなく、世界の東京大学として、その活動のビジビリティを向上させ、学生、研究者、マスコミ、一般の方に対してさらに魅力ある情報発信が出来る様に微力ながら務めさせて頂きたいと思っております。

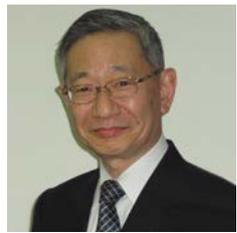
同様に、学部入試は大学が受験生、教育関係者、そして社会へ発する重要なメッセージの一つです。学部学生の多様性を促進するために実施している推薦入試は、開始以来今年

で5年目を迎え、多様なバックグラウンドを持ったすばらしい学生を獲得できつつあります。しかし現在、入学者が募集人員 (100人程度) に満たない状況が続いているのも事実です。今年3月に推薦入試において各学校長が本学に推薦できる人数を倍に増加するという新しい方針が公表されました。今年度はこのような方針の下、より多くの推薦生の獲得を目指す年となります。それには、高等学校や受験生に、本学が推薦入試で求める学生像を理解してもらうとともに、東京大学の教育・研究活動をよりビジブルにしていく必要があります。新型コロナウイルス感染の影響が心配ですが、皆様のお力を借りて広報活動に努めて参りたいと存じます。

副学長

相田 仁

AIDA Hitoshi



昭和55年3月 本学工学部電気工学科卒業
昭和60年3月 本学工学系研究科博士課程修了、工学博士
昭和60年4月 本学工学部助手
昭和61年4月 本学工学部講師
昭和63年2月 米国スタンフォード研究所International Fellow (～平成2年2月)
平成2年4月 本学工学部助教
平成11年3月 本学工学系研究科教授
平成25年4月 本学総長補佐
平成27年4月 本学総長特任補佐
平成28年10月 本学高大接続研究開発センター長
平成29年4月 本学工学系研究科副研究科長
専門分野: 情報通信ネットワーク、並列・分散コンピューティング
研究内容: 相田仁, 酒井善則「NGN接続網における優先パケット課金のモデル化」『電子情報通信学会論文誌B』採録決定(2020)
趣味: 日曜大工、数独などのパズル

副学長

浅見 泰司

ASAMI Yasushi



昭和57年3月 本学工学部都市工学科卒業
昭和59年3月 本学工学系研究科修士課程修了
昭和62年5月 ベンシルヴァニア大学地域科学専攻博士課程修了(Ph.D.)
昭和62年5月 本学工学部助手
平成2年10月 本学工学部講師
平成4年10月 本学工学部助教
平成7年1月 ENPC (Ecole Nationale des Ponts et Chaussées)客員研究員
平成7年4月 本学工学系研究科助教
平成13年4月 本学空間情報科学研究センター教授
平成22年4月 本学空間情報科学研究センターセンター長
平成24年8月 本学工学系研究科教授
平成29年4月 本学工学系研究科副研究科長
専門分野: 都市計画学、不動産学、空間情報科学
研究内容: 1) Usui, H., Asami, Y. (2020) "Size Distribution of Building Lots and Density of Buildings and Road Networks: Theoretical Derivation Based on Gibrat's Law and Empirical Study of Downtown Districts in Tokyo" *International Regional Science Review*, 43(3), 229-253. 2) Suzuki, M., Asami, Y. (2019) "Shrinking metropolitan area: Costly homeownership and slow spatial shrinkage" *Urban Studies*, 56(6), 1113-1128
趣味: パズル、テニス

副学長

武田 洋幸

TAKEDA Hiroyuki



昭和57年3月 本学理学部卒業
昭和60年2月 本学理学系研究科博士課程途中退学
昭和60年3月 本学理学系研究科助手
昭和62年5月 博士(理学)学位取得
平成2年4月 理化学研究所研究員
平成5年10月 名古屋大学理学部助教
平成11年3月 国立遺伝学研究所教授
平成12年4月 本学理学系研究科教授
平成19年4月 本学理学系研究科長・理学部長
専門分野: 発生遺伝学、ゲノム科学
研究内容: 1) Kazuki Horikawa他4名 "Noise-resistant and synchronized oscillation of the segmentation clock." *Nature* 2006 Jun 8;441(7094):719-23. 2) Yusuke Inoue 他9名 "Complete fusion of a transposon and herpesvirus created the Teratorn mobile element in medaka fish." *Nature Communications* 2017 Sep 15;8(1):551.
趣味: スポーツ (テニスなど)、トレッキング



令和元年度卒業式



令和元年度卒業式が、3月24日(火)に、安田講堂において挙行されました。今年度の卒業式は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて大幅に規模を縮小し、各学部の代表者のみの参加によりおこなわれ、10時に開式しました。アカデミック・ガウンを着用した総長、理事・副学長、各学部長の列席のもと、総長から2名

の卒業生総代(法学部 みよし みさら 三吉 慧さん、医学部健康総合科学科 ていよく 鄭 翌さん)に学位記が授与されました。続いて総長から卒業生に告辞が述べられた後、卒業生総代が順に答辞を述べ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、卒業生とそのご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

総長告辞



本日ここに学士の学位を取得し、卒業される皆さん、おめでとうございます。晴れてこの日を迎えられたことに、東京大学の教職員を代表して、心よりお祝い申し上げます。本年度は、10学部を合わせ、3,030名の方が卒業されました。ここに至るまでの長い間、皆さんの学業と研究活動を支えてこられたご家族やご友人の方々のご支援に対して、深い感謝の意をお伝えしたいと思います。

本日も、この安田講堂において、皆さんやご家族の方々とともに、卒業式を挙行できることを楽しみにしておりました。しかし、すでに報道されておりますように、本年度は新

型コロナウイルスの感染拡大を防止するために、このような、いつもとは違う卒業式になりました。形は変わりましたが、様々な場所でライブ配信をご覧の方々と心を合わせ、皆さんの卒業を祝いたいと思います。

新型コロナウイルス感染症は、またたく間に世界全体に広がり、経済や社会に大きな影響を与えています。その克服ははまだ途上にあり、収束に向けた様々な努力が、日々続いています。国内外で、この感染によって多くの方が亡くなりました。お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りすると共に、ご家族の皆様にご謹んでお悔やみを申し上げます。また療養中の皆様には、一刻も早い快復をお祈り致します。

この感染症の拡散を目の当たりにして、現代の人々の活動や経済社会の仕組みが、いかに国境を越えたものとなっているのかを、皆さんも実感したのではないのでしょうか。近年、「自国第一」を唱える主張が目立つようになりましたが、グローバル化はすでに後戻りできないところまで浸透しているのです。限られた地域の利害にのみ目をむけた行動が、いかに無力であるのか。この感染症への対処

の経験は、そのことをはからずも明らかにしたのです。

4年前、2016年4月の入学式において、私が皆さんに「新聞読みますか?」と問いかけたことを覚えているでしょうか。地球温暖化や地域間格差の拡大など、世界規模の課題が深刻化するなか、スマートフォンで気軽にアクセスできる情報だけでなく、海外での報道も含めた、多様な情報源に目を通すことで、自らを相対化する国際的視野を鍛えてほしいと思ったからです。その2016年には、イギリスでは、EU離脱を決めた国民投票があり、米国では、おおかたの予想を覆した大統領選挙がありました。これらの出来事は、その後の世界の流れを暗示するものでした。この4年の間に、世界では不安定化や分裂がいつそう進み、最近では、世代間の分断が際だってきていることを私は大変懸念しています。

このように、私たちの目の前には、人類全体が取り組まなければならない課題が差し迫っています。その課題の解決に向けて、互いの違いを認め多様性を尊重し、様々な知恵を出し合って、協働していくことがますます重要になっています。東京大学では、地球と人

類の未来をより良いものにするために、知の探究を積み重ねていく人材を、「知のプロフェッショナル」と呼んでいます。皆さんが本日にされた学位記は、まさにそうした「知のプロフェッショナル」の資格を証明するものなのです。皆さんには、これまで積み重ねてきた努力に誇りをもつと同時に、謙虚さや誠実さを忘れず、社会からの期待に応え、未来への挑戦を続けて欲しいと願っています。

皆さんがこれから出てゆく社会は、「デジタル革新」とも呼ばれる、大きな変革のまっただ中にあります。この20年の間に、デジタル技術は飛躍的に進歩しました。様々な情報がデジタル化され、サイバー空間の上に、データとして蓄積され続けています。その膨大な情報を解析する技術が、人工知能技術などを駆使することで、急速に発展しています。そして、そのデータを活用するビジネスも次々と生まれ、新たなサービスが社会に速やかに広まっています。私たちは、サイバー空間上の情報を参照しながら、リアルな物理空間で行動するようになってきているのです。皆さんも、日々の暮らしのなかで、スマートフォンが手放せなくなっているはいないでしょうか？

物理空間とサイバー空間の融合は、予想を超えた規模と速度で進んでいます。そして、人と人の繋がり方や、社会や経済の形をも大きく変えつつあるのです。

サイバー空間とリアルな物理空間の融合は、遠隔医療やテレワーキングの実現のように、私たちの生活の質を向上させるサービスを数多く生みだすでしょう。物理的な距離を超えて人々を繋ぐことは、現代社会が抱える地方と都市の間の格差や、年齢や障がいに関わる格差など、様々な問題の解決に役立つかもしれません。その結果、多様な人々が、それぞれの強みを活かして社会に参加できる、より包摂的な良い社会が実現する可能性が広がります。

皆さんは、Society 5.0という言葉に耳にしたことがあるでしょうか。狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く、五番目の社会をSociety 5.0と呼んでいます。この言葉には、サイバー空間と物理空間の融合のなかで実現される、それぞれの多様な個性を尊重しそれを活用できる新しい社会への期待が込められています。同時に、旧来の形あるモノが価値を担っていた資本集約型社会から、知や情報、そしてそれらを活用したサービスが価

値をもつ、知識集約型社会へと転換するのです。2015年に国連はSDGs、すなわち持続可能な開発目標を掲げましたが、Society 5.0はSDGsが掲げるゴールに通じるものなのです。

重要なことは、このより良い社会であるSociety 5.0が、自動的・自然発生的には実現しないということです。サイバー空間に流通する情報は、玉石混濁ですし、フェイクニュースも蔓延しています。それを引き金とした、群集行動や炎上現象など、現代的な問題も発生しています。これまで人類が作り上げてきた、社会の基本的仕組みや信頼を揺るがす脅威が切実なものとなっています。サイバー空間は、国境を越えて、誰もがデータを公平公正に活用できる、公共の場でなければなりません。それが、早い者勝ちで秩序なしに占拠され、荒れ果ててしまつては困るのです。地球環境と同じように、人類全体の共有地、すなわちグローバルコモンズとして守り育てていかなければならないのです。

こうした大きな変革のただ中においても、皆さんには東京大学で学んだ「知のプロフェッショナル」として、さらには、知をもとにして新たな事業を起こす「知のアントレプレナー」として、大いに活躍していただきたいと思えます。その際、何を指針としたらよいのでしょうか。

今年1月にスイスで行われた、世界経済フォーラム、いわゆるダボス会議の議論は印象的でした。地球環境問題の顕在化は、これまでの拡張主義的な経済成長の限界を示しています。人類社会が、地球環境と調和的で、持続可能な発展を図るためには、「成長」の意味を考え直す必要があります。そこで強調されていたのが、“No one will be left behind”、どんな人も取り残さない包摂性であり、その包摂性のなかで追求する成長、すなわち「インクルーシブ・グロース」という考え方でした。均一化と効率化を進めたこれまでの経済成長のもとで、「違い」は切り捨てられがちでした。ところが、その「違い」を活かすことが可能であり、それこそが、新たなグローバルな価値創造と成長の源泉になると、考え方の方向性が変わったのです。そこにおいて、個々人の個性の違いや、地域の多様性が新たな意味をもってきます。

インクルーシブ・グロースという新しい成長の形は、今後の地球社会に向けた一つの指

針となるものです。その具体例として、東京大学の2つの施設を取り上げ、大学と地域の関係から見えるインクルーシブ・グロースについてお話しします。

飛騨市神岡町の鉱山内に、宇宙線研究所の観測施設のカミオカンデが設置され、現在第二世代のスーパーカミオカンデが稼働しています。そこでのニュートリノ検出の研究が、二つのノーベル賞受賞に結びついたことは、皆さんもよくご存知でしょう。しかし、その最先端の研究が、実は神岡町という地域と深く繋がっていることについては、あまり知られていないかもしれません。

神岡鉱山は、日本初の公害病である、イタイイタイ病の原因となった場所でもあります。かつての神岡町は、公害病の町として知られていました。その頃の患者の皆さんの苦しみは、我々の想像をはるかに超えるものであったはずで、宇宙線研究所の観測施設は、神岡鉱山の硬い岩盤という特長を活かして建設されました。しかし、地域の公害の記憶を忘れてのことではありません。地域の記憶を踏まえ、長い時間をかけて地域との交流を続け、信頼を培ってきたなかで、初めて築かれたものなのです。

そして、2つのノーベル賞がきっかけとなり、全世界にその名を新たに知られるようになりました。昨年3月には、神岡町内の商業施設に、宇宙や素粒子研究を紹介する展示施設である、ひだ宇宙科学館カミオカラボが開設されました。1年足らずのうちに、10万人を超える来館者を集めています。今、神岡町は、「科学の町」、「きれいな水の町」として、自らのローカル・アイデンティティを確立しようとしています。

なぜ、「きれいな水の町」なのでしょう。カミオカンデやスーパーカミオカンデにある、ニュートリノを検出する巨大タンクは、大量の超純水で満たされています。超純水とは、通常の浄水装置では取り除けないわずかな不





純物を、様々な工程を経て取り除いた、極めて純度の高い水です。神岡地域には、観測に必要な超純水にすることができる、きれいな水が大量にあったのです。

梶田隆章先生が小柴昌俊先生の研究室の大学院生であったころ、カミオカンデの観測実験は立ち上げ期にありました。神岡坑内のきれいな水は、純水装置のフィルターを通しただけで、30mの透過率がありました。それは、ニュートリノに由来する青いかすかな光を、センサーで検出する実験に適していたのです。しかし、実際にデータをとりはじめると、ノイズがひっきりなしに入ることに梶田先生は悩まされました。ある時、純水製造装置を止めてみたところ、ノイズはみるみるうちに減りました。タンクには鉱山の地下水を、フィルターを通して注入していました。ノイズの原因は、その地下水に含まれていた、フィルターでは取り除けない放射性物質のラドンだったのです。梶田先生の大学院での研究の最初の数年間は、こうした異物の混入防止や殺菌など、未踏の水準にまで水を純粋に、きれいにするための地道な作業と工夫に費やされたのです。

さて今年、いよいよ第三世代の施設である、ハイパーカミオカンデの建設がはじまります。そこでは、さらに大規模な装置によって、ニュートリノ観測の感度をいっそう上げることで、なぜ宇宙では反物質ではなく物質が優勢なのかという、大きな謎の解明に挑戦することになっています。現在、地下実験施設への入り口は山の中にあります。ハイパーカミオカンデは神岡町の中心部に来るために、地元の皆さんと研究者が接する機会もさらに増えると思います。地域の特性を生かした大学の基礎研究が、地域の活性化やローカル・アイデンティティの構築にいっそう貢献していくことを願っています。

もう一つ、東京大学大気海洋研究所の国際沿岸海洋研究センターの取り組みを紹介したいと思います。これは、1973年に、岩手県

大槌町に設置された研究施設です。先の東日本大震災では、このセンターも壊滅的な被害を受けました。

私も2015年に同センターを訪問しました。それは、震災からの復興として、新研究実験棟が竣工される前でした。その後も、2017年と2018年に、大槌町で開催された追悼式にも参加し、現地の多くの方々の努力により、着実に復興が進んでいると感じました。しかし、まだ道半ばであることも事実ですので、私たちが引き続き、復興に向けた努力を続けなければなりません。

この研究センターでは、震災直後から、地震や津波が東北の太平洋沿岸部の海域の生態系に対してどのような影響を及ぼしたのかを、自然科学的に調査しています。この研究に大いに役立ったのが、設立時から40年にわたって蓄積してきた、海洋環境や生物に関する記録データでした。観察データと科学的知見の継続的な蓄積があって初めて、自然災害の影響を正確に評価することができるのです。ここで強調しておきたいことは、震災前のデータの多くは、特定の研究のために取得したものではなく、研究のベースとして対象である地域の基礎的な記録として地道に蓄積していたものだったということです。

東京大学の国際沿岸海洋研究センターは、海洋の基礎研究の国際的な拠点として、多くの研究者に利用されてきました。その一方で、周辺の地域住民に必ずしも親しまれてはならず、必要とされる施設でもありませんでした。震災後の研究も、巨大な自然攪乱の結果を科学的に解明するという、純粋に科学的な海洋学の研究として動き始めました。ところが、始めてみると、水産業の復興など、地域住民の生活に直接資する知見を提供することも求められたのです。震災をきっかけに、地域への関与の重要性が認識された、重要な転換点でした。

センターの三陸地域研究は現在、地域の多様性を自然科学的にも社会科学的にも重視する、ユニークな新しい研究領域を開拓しつつあります。

たとえば、GPSを搭載した海上ブイを使うと、波の高さや向きを精密に測定することができます。震災後に、この波浪計測のGPSセンサーを使って三陸沿岸の様々な湾の波が詳細に計測されました。その結果、湾の形状

と海流の向きによって、波の特徴が大きく異なることがわかってきました。同じ太平洋に面していても、リアス式海岸に点在する小さな湾や浦では、その形状の微妙な違いによって特異な生態系が形成されており、収穫される海産物やその利用の仕方もそれぞれに少しずつ異なっていることが知られていました。こうした地域ごとの食文化や風習の多様性が、実は自然環境の多様性と関係して生まれてきたことが見えてきたのです。

海洋科学研究が地域の多様な文化の理解と繋がるということは、理系の研究と文系の研究を繋ぐきっかけも生み出しました。昨年からは開始された「海と希望の学校」プロジェクトは、その一つです。そこでは、地元の海に関する知識を、小中学生や高校生を含む地域の方々へ伝え、共に学ぶ活動を行っています。

このプロジェクトには、東京大学の社会科学研究所も深く関わっています。社会科学研究所は震災前から、「希望の社会科学」と「危機対応学」の研究を独自に進めてきました。

「希望」は、それぞれの人にとっての望ましい未来です。それゆえ、個人や地域によって異なるものとなるでしょう。だからこそ、望ましい未来を共有するためには、個人や地域の多様性を理解し、互いに受けとめることが大変重要です。「海と希望の学校」の活動は、海洋の基礎研究の成果をベースにしながら、この地域に特有の自然環境やそこで育まれてきた独自の文化について、地域の方々と一緒に考える機会となっています。

「危機対応学」の調査研究からも、社会における多様性の重要性が浮かび上がっています。当初の想定を超えた大規模な自然災害に直面したときに、即座に適切に対応することは、たやすいことではありません。そのような力を醸成するには、他者への寛容、未知への好奇心、異なる主体との積極的交流が必要です。それには、多様性を許容する社会が広く実現していなければならないのです。

地域に暮らす人々が地元の海の多様性と豊かさについて理解を深める。これは、地域のローカル・アイデンティティを確立するだけでなく、将来の自然災害への備えにも繋がるのです。

さて、宇宙線研究所と神岡地域との関係、大気海洋研究所と三陸沿岸地域との関係をお話してきました。そこから見えてくるのは、

大学での研究教育は地域社会の発展と無縁ではないということです。

そこには、希望を養い希望を育てる場としての大学の役割や、地域を耕しその発展の原動力となる大学の可能性が見えています。大学の教育や研究を通して、地域にとって大切なものは何かを考え、またそれを実現するための道筋について考え、それを地域と共有することこそが、希望と未来の創出に繋がるのです。

皆さんはこれから、国内であれ海外であれ、自分が生まれ育った場所とは違った地域で、様々な経験をされるはず。その時に、違

いを恐れて違いを排除するのではなく、違いのもつ意味をポジティブに捉えて、それを楽しむ姿勢をもってほしいと思います。

そして、大学は社会とも深く繋がっています。皆さんには、卒業後も東京大学との繋がりを保ち、多様な人材との知識交流の場として利用していただきたいと思います。卒業は、大学との関係の終わりを意味しているわけではありません。東京大学もまた、皆さんと一緒にインクルーシブ・グロースに向けた社会変革を駆動する力になりたいと願っています。

最後に、ここに卒業の日を迎えられた皆さんが、

大きな変革の時代におけるより良い社会の担い手として、健康で幸せな、希望に満ちた未来を築かれることを心より祈念して、お祝いの言葉とします。本日は誠にありがとうございます。



答辞



法学部
三吉慧さん

本日は、私たち卒業生のためにこのような式典を催していただき、誠にありがとうございます。また、昨今の社会情勢のなか、開催にご尽力いただきました皆さまに、卒業生一同心より御礼申し上げます。

随分と、贅沢をしました。

好奇心のままに行動する時間が与えられたこと、思う存分考えられる環境に恵まれたこと、卓越した優しき友に出会えたこと、そしてここ東京大学で過ごした時間そのものが、私にとって最高の贅沢でした。

前期教養課程の「初年次ゼミナール」では、テキストを批判的に読むことが求められました。「既存の主張を所与とせず、相対的に捉える営み」、それは大学に入ってはじめて取り組んだものでした。文科Ⅱ類から進んだ法学部でも、法や政

治といった、私たちの生活に深く関わる事象に対して批判的に考えることに挑みました。その前提となる知を習得し、吟味し、考えを言葉にする作業を繰り返しました。

しかし、この反復のなかで、私は批判的に考えるということが、いかに困難なものかを痛感しました。前提となる知の習得をいつのまにか諦めてはいないか、思考するまさにこの自分は真に批判的たり得ているのか、常に問い続けなければなりません。そして何より、対象に真摯に向かわんとする覚悟を、自分自身の責任で決めなければなりません。その重圧を前にして、時に迷い、時に立ち止まってしまう未熟な私を、いつも励まし、支え、導いてくれたのは、尊敬する先生方であり、思いを共有し、活発に議論を交わした友人たちでした。

そもそも、私たちのこうした営みの土台となる知もまた、先人たちの絶え間なき批判的思考の結晶です。多くの情報が飛び交い、より簡単に他者の考えに触れることができる現代においては、そのなかで気に入ったものを鵜呑みにする方が楽かもしれませんが、それでも、卒業していく私たちには、知を継承する者として、今日この時まで贅沢な時間を謳歌した者として、目の前のものに真摯に向かわんとする覚悟を胸に、これからも批判的に考え続ける使命があります。

数えきれないほど多くの人に恵まれた、心の赴くままに歩んだこの贅沢な時間は、生涯誇ることでできる財産として、私たちに深く刻まれています。最後になりますが、お世話になった全ての方への心からの感謝と、東京大学の益々の発展を祈念して答辞といたします。

答辞



医学部健康総合科学科
鄭翌さん

春爛漫の候、暖かな日差しを感じる季節となりました。本日は、未曾有の緊急事態の中、私たち卒業生のために式典を催していただき、誠にありがとうございます。また只今五神総長より告辞のお言葉を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

前期教養課程を経て、私は医学部健康総合科学科に進学し、公衆衛生学から分子生物学、統計学から看護学まで、健康にまつわる包括的な学問を学ばせていただきました。昨今、医学とは、病院の中で完結するだけのものではありません。紀元前5世紀、医学の父ヒポクラテスが、著書である「空気・水・場所」に健康と環境について議論され、公衆衛生学の起源とされています。現代社会は、かつて無いほどに人口と移動が増え、人類が誕生した以来、最大の環境変化の真っ只中にいます。昨年末、私の生まれ故郷でもある中国武漢市に始まった新型コロナウイルスは、今や世界中の社会・経済に暗い影を落としているように、国や地域を隔てて医療

を論じることは不可能です。

私は学業の傍、医療通訳として医療の現場に携わっていますが、日々医療環境の国際化を感じております。旅行者を対象とする渡航医学だけでなく、異文化医療に関わるメンタル・フィジカルな問題は日に日に多様化しています。このように、益々と複雑化する医療現場では、様々なコンフリクトも起こりやすくなっています。他人に自らの常識を押し付けても、自分自身がまた他人の常識を知らずに、誤った道に進んでしまう可能性ははらんでいます。

私たちはとても幸運です。東京大学で過ごした4年間または6年間の間、私たちは周囲から手厚いサポートを受け、深い教養と自由な発想力を身につけました。多様化する現代社会では、正解の無い難問に直面することもあれば、納得の行かない理不尽な批判を受けることもあります。溢れかえる情報と主観の中においても、節度ある社会の一員として、冷静且つ思いやりのある行動を心がけ、益々と

変化して行く国際社会に、優しさと平等さが溢れることを祈って、それぞれの得意分野を活かし、卒業生一同、一人ひとりに託された使命を精一杯果たします。

最後になりますが、本日までご指導、ご支援して頂いた諸先生方、職員の皆様、支え合い、励まし合ってきた友人たち、そして、一番近くで支えて下さった家族に、心より感謝申し上げます。皆様方のご健康と東京大学の燦然たるご発展をお祈りし、答辞とさせていただきます。





令和元年度学位記授与式

令和元年度学位記授与式が、3月23日(月)に、安田講堂において挙行されました。今年度の学位記授与式は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて大幅に規模を縮小し、各研究科の代表者のみの参加によりおこなわれ、10時に開式しました。アカデミック・ガウンを着用した総長、理事・副学長、各研究科長の列席のもと、総長から2名の修了生総代（経済学研究科博

士課程 さしただい 岸下 大樹さん、薬学系研究科博士課程 おおひがしのりたか 大東 宣貴さん) に学位記が授与されました。続いて総長から修了生に告辞が述べられた後、修了生総代が順に答辞を述べ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、修了生とそこご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

総長告辞

本日ここに学位記を授与される皆さん、おめでとうございます。東京大学教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。また皆さんをこれまで励まし支えてくださったご家族や友人の方々にも、お祝いと感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

本年度は、修士課程3,320名、博士課程1,223名、専門職学位課程344名、合計で4,887名の方々が学位を取得されました。そのうち留学生は1,113名です。

皆さんは、修了の日を迎え、これまでの日々を振り返り、様々な感動あるいは苦労を思い起こしていると思います。研究仲間や教

員とのかかわりのなかで、知の創造の場としての東京大学を実感された方も多いでしょう。4月から、大学や企業で研究を続ける人もいれば、様々な職業の新たな世界に踏み出す人もいるでしょう。東京大学での経験が、皆さんの今後の活動の土台となっていくことを期待しています。

本日の学位記の授与を、皆さんやご家族の方々と共に、ここに集って、祝うことを私たちも楽しみにしておりました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、いつもとは違う形で式を執り行うことに致しました。いろいろな場所でライブ配信をご覧の皆さんと一緒に、いわばバーチャルに拡張された安田講堂において、祝いたいと思います。

さて、新型コロナウイルス感染症は、またたく間に世界全体に広がり、経済や社会に大きな影響を与えています。その克服はまだ途上にあり、収束に向けた様々な努力が日々続いています。国内外で、この感染によって多くの方々がお亡くなりになりました。お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りすると共に、ご家族の皆様にご挨拶とお悔やみを申し上げます。また療養中の皆様には、一刻も早い快復をお祈り致します。

この感染症の拡散を目の当たりにして、現代の人々の活動や経済社会の仕組みが、いかに国境を越えたものとなっているのかを、皆さんも実感したのではないのでしょうか。近年、「自国第一」を唱える主張が目立つようになりましたが、グローバル化はすでに後戻りできないところまで浸透しているのです。限られた地域の利害にのみ目をむけた行動が、いかに無力であるのか。この感染症は、そうした事実を明らかにしたのです。

これから皆さんが進んでいく世界は、「デジタル革新」とも呼ばれる大きなうねりの中にあります。そして、人類にとって未知の、これまでなかった環境が社会に生まれつつあります。

文字だけでなく音声や画像など、様々な情報がデジタル化され、サイバー空間の上に、データとして蓄積され続けています。その膨大な情報を人工知能技術などを駆使して、一気に解析する技術が、急速に発展しています。私たちは、サイバー空間上の情報を日々参照しながら、リアルな物理空間で行動するようになっているのです。この物理空間とサイバー空間の融合は、人と人の繋がり方や、社会や経済の形をも大きく変えつつあります。



製品やモノの生産が経済的な価値を担っていた資本集約型社会は終わりをづけ、知識や情報と、それらを活用したサービスが価値を作り出す、知識集約型社会へのパラダイムシフトが進行しています。

それによって、遠隔医療やテレワーキングのように、物理的な距離を超えて人々が繋がり、地方と都市の違い、老若の違いや障がいのあるなしといった、現代社会が抱える様々な格差が解消されるかもしれません。大量生産・大量消費の時代に切り捨てられがちであった、個々の違いを丁寧に汲み取り、多様な人々がそれぞれの強みを活かすインクルーシブな社会が実現する可能性があるのです。しかし他方で、データが一部の企業や国家に独占されてしまい、データを持つ者と持たざる者との間に断絶や決定的な格差が生まれてしまうという、悪いシナリオへと陥る危険もあります。

どちらに向かうのか。人類は、今、まさに分水嶺に立っているのです。

私は2015年4月に総長に就任し、任期中の行動方針を「東京大学ビジョン2020」としてまとめ、10月に公表しました。その冒頭に、「卓越性と多様性の相互連環——知の協創の世界拠点として」という理念を掲げました。その後の5年間を振り返りますと、温暖化や地域間格差などの地球規模の課題がいつそう深刻化するなかで、世界は、旧来の延長線上にはない、不安定で見通しがつきにくい状態へと急速に転換しているように感じます。東京大学ビジョンでは、より良い社会に向かうために、大学が社会の変革を駆動する力を備え、自ら主体的に行動することを謳いました。そのためには、「多様性 diversity」の追求に加え、「包摂性 inclusiveness」の理念が、大変重要になります。しかし、この両翼ともいうべき2つの理念の密接な結びつきは、まだ十分に理解されず浸透していないと、私は日々感じています。

本日、皆さんが新たな出発の大きな一歩を踏み出すにあたって、この「多様性」と「包



摂性」の結びつきを、是非、心に刻んでいただきたいと思います。

皆さんは、大学とは新たな知を探究する場だ、と思っておられるでしょう。これはまちがってはいません。しかし、それだけでは十分ではありません。知というものは、他者と共有されてはじめて力を持ち、活かすことができるのだということを忘れてはなりません。知は、それを自分が獲得するだけではなく、他者と共有することが不可欠なのです。

知は、そもそも誰もがアクセスできる、人類全体に開かれた公共財です。開かれているのだから、共有されるのは当たり前で、放っておいても大丈夫だ、と思われるかもしれませんが。たしかに、観察や実験を通して得たデータを、論理と数学を駆使して積み上げてきた近代科学や、貨幣の循環をベースにした近代の経済活動の拡大は、そうした誰もがアクセスできる自由でオープンな場が、「学術誌」や「市場」としてあったからこそ、発展してきたのです。しかしながら、公共財の新たな共有は、自然に、自動的に生み出されるわけではありません。現実にはそれほど簡単ではないのです。しかし、まさにこの「簡単ではない」「一筋縄ではいかない」ところこそ、人間や社会がもつ大きな潜在力や可能性が隠れています。そして、それを探究し発見する面白さが、私たちが惹きつけているのです。この難しさと面白さの関係を、もう少し深く考えるために、皆さんが毎日使っている「言葉」すなわち言語の働きについて、あらためて検討してみましょう。

私たちはつい、言葉という道具のもつ機能は単純明快かつ確実であって、それを使いこなす能力は誰にも共通していると思いがちです。私は実験物理学が専門ですが、科学論文を書く際には、誰が読んでも常に同じ解釈に至る、明確な表現をするべきだと教育を受けてきましたし、学生にも正確に書くことと教えています。しかし言葉は、決して無色透明で公平中正な媒体ではありません。様々な記号の中でも、とくに自然言語は、意味の揺らぎを伴い、価値や感情を帯びています。つまりノイズが混ざっているのです。表現の失敗や解釈の誤りから、すれ違いが起きたりするのは日常茶飯事です。伝える側と受け取る側の文化の違いから、様々な障害や摩擦が生まれます。

これは本当に面倒なことです。言葉が数式のように、透明でノイズのない明快な「ツー

ル」に徹していてくれたら、どんなに便利なことでしょう！ ここで思い出しておきたいのは、言葉の使命が、情報の伝達だけではないという歴史的な事実です。今でも、映画の名シーンのセリフや、昔口ずさんだ歌の歌詞は、過去の思い出や感情を呼び起こすでしょう。言葉は単なる情報の運び屋である以上の役割を果たしているのです。

言語の多面的な役割を考えると、傳田光洋さんという研究者の仮説が面白い視点を与えてくれます。SF作家としても知られる傳田さんは、京都大学の大学院で化学工学を学ばれたのち、民間企業で皮膚の研究をされています。傳田さんの仮説は次のようなものです。

人類はおおよそ120万年前に体毛を失ったのだそうで、これは人類の進化の歴史における、とても大きな変化でした。それは、衣服や家屋の発達をもたらし、生活の多方面に影響を与えました。そのなかで、最も大きな意味をもったのが、コミュニケーションの変化でした。

サルを観察すると、互いに「毛づくろい」をしている姿を、よく見かけます。研究によると、この「毛づくろい」は、サルに心地よさをもたらすだけでなく、集団としての社会性の維持や関係づくりに、重要な役割を担っているのだそうです。実は、人類も、体毛を失うまでは「毛づくろい」を通して、互いに快感を与え合うコミュニケーションをしていました。ところが体毛を失うことで、人類はその毛づくろいの機会を失ってしまいました。そこで新たに活用されるようになったのが、皮膚でした。傳田さんの言い方を借りると、皮膚はとても「賢い」のです。狭い意味での触覚以外に、光のあたたかさや音の響きを感じることもできます。皮膚温の低下を通して、パートナーの気持ちが冷めたことを見抜く人もいます。皮膚は、私たちが外界と付き合うためのセンサーの役割を果たしてくれている、というのです。

注目したいのは、その機能が、人間が高度に発達させた新しい道具である言語に受け継がれたことです。人類は、進化のプロセスのなかで、言語を獲得しました。それは、約20万年前のことだったと言われています。つまり、コミュニケーションの道具が、体毛から皮膚へ、そして皮膚から言語へと移ってきたのです。言い換えると、言葉は本来、人間の生理的な身体性に直結しているのです。

言葉は、毛づくろいや皮膚を通した触れあいと同じように、感情や価値観を巻き込んだ、曖昧で多様な交流を支えてきたのです。

毛づくろいにまで遡って人類のコミュニケーションを考えてみて思うのは、私たちが現在、「曖昧だ」、「邪魔だ」、「不必要だ」と見なしがちな複雑性こそが、むしろ言語の本質的な要素かもしれないということです。そうした働きを失ってしまうと、言語は言語たりえず、もっといえば、人間は人間たりえないのかもしれないのです。

言葉によるコミュニケーションは、単なる情報伝達の行為ではありません。メッセージをやり取りする前に、まずはアイコンタクトがあったり、挨拶があったり、無駄な独り言があったりします。声の調子や語り口は、微妙なニュアンスを伝えますし、沈黙にも複雑な働きがあります。情報の伝達以前に、私たちは、相手に興味をもち、その存在を認め、喜怒哀楽の感情を伴う交流をもつのです。そこには賛同や感動もありますが、ときには反発や不信から、もっとネガティブな感情さえ生まれることもあります。他者は愛すべき存在ともなりますが、ときには理解できない危険な存在でもあります。これらは、言葉を情報の伝達現象としてみるならば、余分なノイズかもしれません。しかし、こうしたノイズの部分こそが、感情の交流や文脈の共有といった基本的な信頼を組み立てるためには、実は、非常に大切なのです。

他者とのコミュニケーション、すなわち触れあいの出発点は、相手の身体的な存在に対する、無条件の尊敬 respectであり、それこそが真の共感の原点ではないかと思えます。他者はまず、身体をもち、生命を有する絶対的な存在感と共に立ちあらわれます。その身体性はリアルな物理空間に存在するもので、バーチャルなサイバー空間では見落とされがちです。「わたし」と「あなた」という、異なる身体があってはじめて、空間はリアルなものとなる。このような異物感を有する他者との出会いは、決して無駄なものでもなければ、なしですませたほうが良いものでもありません。それは、社会をつくり、動かしていくための、きわめて本質的な「準備」なのです。そして、そうした触れあいは、知の「共有」のみならず、知の「探究」においても重要な要素となるのです。

言葉は、曖昧で不完全な道具です。この道具の使用が、毛づくろいのイメージの触れあ

いに始まったのだとすれば、誤解の解消、葛藤の乗り越えといった、複雑なプロセスを含まざるをえないのです。同じように、「知」の共有における言葉の使用も、反論や誤解、無理解、衝突、葛藤といった、様々な障害と遭遇するのです。

皆さんも、これまでの大学生活のなかで、他者と理解を共有できずに戸惑ったことを、数限りなく体験したのではないのでしょうか。共同研究者と意見があわない、先生にわかってもらえない。あるいは先生の言っていることがさっぱりわからない、勉強しても知識が身につかない、といったことです。そうした体験は、「あ、わかった!」とか「そういうことだったか!」といった、記憶に残る心地良い感動と違って、なかったことにして記憶から消されてしまうことも多いかもしれません。しかし、そこには、生々しい他者との出会いや、どうにもならない自分との向かい合いがあったはず。実は、そうしたプロセスによってこそ、知の分厚い土台が形成されるのです。異論とのぶつかりあい、誤解や無理解などを通してこそ、共有されるべき知は磨かれ、輝くのです。

冒頭で申し上げたことにもどって、「多様性」と「包摂性」という両翼の重要性という話題に繋げてみたいと思います。

多様性を尊重し、それを活力として卓越性を追求する。この実現は、簡単なことではありません。異なる常識や価値観をそのまま受け入れれば良いというわけでもありません。それでは、洗脳による支配と大して変わらないからです。そうではなく、異なる価値観をもつ人と顔をつきあわせて語りあい、大きな譲歩や転換も恐れなければならないことが必要なのです。たとえ必ず正しいと信じる考え方が自分にあったとしても、それを押しつけてはなりません。相手の考えと重ねあわせることができる理想のかたちを、真摯な対話によって共に探すのです。社会全体のバランスや、弱者や少数者への配慮を忘れずに、より良い「共生」を目指す態度こそが、「包摂性」の基礎です。そこに多様性を尊重する意義があるのです。昨年のホームカミングデーにお招きした、養老孟司先生の言葉が印象的でした。情報技術における個人認証についての話題のなかで、「私とは何者かを識別するのは、私自身がつ固有のノイズである」といったことを語られました。高度に複雑である有機的な統合体が、その本来の機能を発揮するには、その有

機体が内包する多様な要素が連関している必要があります。それらは異物と見えるかもしれませんが、他者と関わりをなかで時に必要になるものなのです。結論を急ぐ立場からは、そのような多様性は、面倒なノイズに見えるかもしれません。けれどもそこには、個に固有の本質が書き込まれていて、それがさらに高度な多様性を生み出し支えるのです。その違いやズレを見落とさずに、ノイズを読み取るには、感性と想像力が必要です。その育成は、排外主義や自国第一主義が目立つ現代だからこそ、より重要になってきているのではないのでしょうか。個の違いに対する鋭敏で豊かな感受性は「包摂性」を追求する上で、不可欠の前提なのです。

だからこそ、耳に逆らう異なる意見も、異質で多様な他者との遭遇も、これまで以上に大きな役割を果たす、と私は感じています。「知のプロフェッショナル」である皆さんには、言語が決して透明な道具ではないこと、知の作法が固定的で決まりきったものではないことを、いつも意識してほしいのです。そして言語がときに生み出す「ノイズ」を冷静に感知し、賢くしかも創造的に対応できるような感性を、さらに磨いていってください。これは、まだまだ人工知能にはできないことです。ノイズの中には、大発見に結びつく宝があるかもしれません。それを見分けられるような、いわば「ノイズのソムリエ」を目指してもらいたいのです。そして地球と人類社会の持続可能な発展に貢献してほしいのです。

今日、皆さんが巣立っていく東京大学での経験は、皆さんのこれからの何よりの財産となるでしょう。そして、今日お話ししたような「多様性 diversity」と「包摂性 inclusiveness」という左右の翼を、力強く羽ばたかせることで、より大きな飛躍を果たしてくださることを、切に願っています。

これからの歩みのなかで、再び原点に立ち戻る必要を感じる時があるかもしれません。あるいは、本学で共に学び、研究をした仲間達と再び協力しあいたいと思うかもしれませ



ん。その時には是非、東京大学を活用して、新たな協創の輪に加わっていただきたいと思っています。東京大学は常に、皆さんと共にあります。卒業は大学との別れではありません。新たな協働の始まりです。どうかこれからも、本学の成長に積極的に関わってくださいますよう、心からお願い申し上げます、お祝いの言葉を結びたいと思います。

本日は誠に、おめでとうございます。



答辞



経済学研究科博士課程
岸下大樹さん

本日は、新型コロナウイルス蔓延への懸念が広がる中、このように式を催して頂きましたこと、修了生を代表し心より御礼申し上げます。また、只今、五神総長から、温かい激励のお言葉を頂きましたこと、重ねて感謝申し上げます。

私は、東京大学で、学部・大学院の9年間の時を過ごしました。専門は、ゲーム理論を用いて政治現象を分析する、political economicsと呼ばれる分野です。実は、この分野の専門家は、国内に多くはありません。しかしそれは、私が本学で助言を頂いた先生方が少ないことを意味しません。指導教員を含め多くの先生方が、自らの狭い意味での専門にこだわらず、快く助言を下さいました。一流の先生方が、分野をこえて存在する—この素晴らしい環境の下で研究できたことは、私にとり幸運でした。

もちろん、大学院での研究生生活は順風満帆ではありません。論文が学術誌に受理されず不安感を抱くこと、50年後に残る研究とは何だろうと疑問を抱くこともありました。また、多くの経済的な支援制度が存在するとはいえ、学部卒業後

に社会で働く同級生と比べれば、大学院生が一年に手にできる金額は、十分ではありません。多くの修了生が、大学に残ることに迷いを感じた経験を持っていることと思います。

そうした中であっても研究を進めるためには、自分の専門とする分野・アプローチへの愛着、そして、「この方法を用いれば、必ず現象を解き明かせるに違いない」という確信が欠かせません。私自身、経済学を通じて社会現象の重要な側面が解明できると信じ、研究に取り組んでいます。そして、愛着や確信は、研究を重ねるほど強まります。

しかし、そうした愛着・確信は、常に、同程度の謙虚さによって補われなければなりません。近代経済学は、経済以外の社会現象の分析にも足を踏み入れることから、「経済学帝国主義」と揶揄されます。経済学者であれば、経済学の社会科学としての有用性に確信を持つべきでしょう。しかし、様々な現象の分析に有用であることは、社会現象の全側面が経済学によって明らかになることを意味しません。経済学のアプローチでは光を当てられな

い側面が存在し、総合的理解には多様なアプローチが必要だからです。にもかかわらず、時に私たちは、特定のアプローチだけにに基づき、現象の全側面が解明できたと誤解してしまいます。自らの内にある、こうした過度な楽観主義を戒めつつ、大いなる愛着と確信を持って自らの専門とする学問にこれからも向き合っていきたいと考えます。

本日、学位を拝受した私たち修了生は、それぞれが本学での研究を通して培った専門知識を基に、新たな一步を踏み出します。今、社会は多くの課題を抱えています。学問がそれらを解決する即効薬をいつも提示できるわけではありません。それでも、楽観さと謙虚さを同時に持ち、諸問題の解決に貢献できるよう、私たちは邁進していく所存です。

最後になりますが、これまで大学院での生活を支えてくださった諸先生方、職員の皆様、友人や先輩・後輩の皆様、そしていつも私の選択を尊重し支えつづけてくれた両親に心より感謝いたします。東京大学のますますの発展を祈念して、答辞とさせていただきます。

答辞



薬学系研究科博士課程
大東宣貴さん

本日は新型コロナウイルスの感染拡大を予防する観点から、修了生全員の参加は叶いませんでしたが、こうして式典を催していただきましたこと、修了生を代表いたしまして心より感謝申し上げます。また、ただいま五神総長より激励のお言葉をいただきましたこと、重ねて御礼申し上げます。

私は大学院では薬科学を専攻してまいりました。大学院での研究生生活は、知識の吸収が主だった学部時代とは異なり、誰も答えがわからない問題に対して主体的に取り組まなければならない、時に困難を感じることもありました。それでも、多くの意欲の高い学友に囲まれ、最先端の実験機器も使える、東京大学という恵まれた環境のなかで、純粋に好奇心のままに知を探求できたことは私にとってかけがえのない経験であり、やりがいを感じるものでした。私は、自ら進めてきた

研究において、生体にとって必須の機能を持つプロテアソームという分子複合体の細胞内での動態を制御する機構の一端を明らかにしました。こうした成果が得られたのも、自由な発想が尊重される風土に加え、親身になって相談に乗っていただき、的確にご指南いただいた先生方のおかげです。自らが創造した知が、他の新たな知を生み出す礎となることを考えると、学問の発展の一翼を担えたことにとっても嬉しく思います。

明日から私たち修了生は、それぞれ別の道を歩むことになります。かつて東京帝国大学の教授であり、日本薬学の父と呼ばれる長井長義先生の言葉に「失敗しながら未知に挑め!」とあります。この言葉の通り、失敗が続いても諦めず、試行錯誤を重ねていく忍耐力や、自ら課題を見つけ解決する力が、これからの社会を牽引する原動力になると思います。東

京大学で学んだことを糧とし、日本ひいては世界の発展に貢献できるように日々精進してまいります。

最後になりましたが、五神総長を始めとし、今日に至るまで私達をご指導ご鞭撻下さいました多くの先生方、多方面でご支援をいただきました職員の方々、多くの苦勞を共にし切磋琢磨した友人や先輩・後輩の皆様、そして今まで見守ってくださったご家族の皆様、心より御礼申し上げます。皆様のご健康と東京大学の今後のより一層のご発展を祈念し、私の答辞とさせていただきます。



式典写真：尾関裕士

令和2年度入学者へのメッセージ

本年度の入学式・大学院入学式は、両国国技館での開催の準備を進めていましたが、新型コロナウイルス感染の拡大防止のため、挙行を取りやめました。入学者の皆様にも万全の体調で新しい学生生活に臨んでもらうためのやむを得ない措置で

した。本学は、入学者やご家族の皆様にも直接お祝いの言葉を伝えられなかったかわりに、総長の式辞や来賓の祝辞など、入学式でお伝えする予定だったメッセージを動画配信でお届けしました。ここにその内容を掲載します。

総長式辞

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんは4月の入学者としては、令和という新しい時代の初めての東京大学新入生です。私も気分を新たにしながら、東京大学の教職員を代表して、心よりお祝いを申しあげます。特に今年、学部新入生の皆さんは、新型コロナウイルスの感染への警戒という、経験のない環境下での入学試験となりました。その中で、日頃の学習の成果を発揮し、私たちの期待に応えたことに、敬意を表します。入学された皆さん、そして、愛情をもってその努力を支えてこられたご家族、関係する方々に心よりお祝い申し上げます。

本日入学された皆さんの数は、学部生が3,118名、大学院生が4,519名、このうち、修士課程が2,995名、博士課程が1,196名、専門職学位課程328名です。また、外国人留学生は学部37名、大学院716名です。

今日4月12日は、東京大学の創立記念日です。例年この日に入学式を行うことにしています。私たちが皆さんやご家族の方々と共に入学を祝う式典を楽しみにしておりました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、いつもとは違う形でお祝いの言葉を贈ることに致しました。

さて、新型コロナウイルス感染症の拡大は未曾有の事態です。またたく間に世界全体に広がり、経済や社会に莫大な影響を与えています。深刻さが日々増すなかで、収束に向けた必死の努力が続いています。現場で過酷な業務に就いている方々に、心からの敬意と感謝の意をお伝えしたいと思います。国内外で、この感染によって多くの方々が亡くなられました。お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りするとともに、ご家族の皆様にも謹んでお悔やみを申し上げます。また療養中の方々には、一刻も早い快復をお祈り致します。

この感染症の拡散を目の当たりにして、現代の人々の活動や経済社会の仕組みが、いかに国境を越えたものとなっているのかを、皆さんも実感したのではないのでしょうか。この危機の特徴は、先の東日本大震災とは異なり、世界各地で同時に起きているということです。どうすれば食い止めることができるのか、その道筋が見えないなかで不安が広がっています。しかし、これは必ず終息するのです。絶望して、諦めてはなりません。

ここで私たちが理解すべきことは、この感染の拡大は自然現象ではなく、一人一人の行動を媒介として、世界全体に大きく広がる社会現象だということです。今求められていることは、個人の行動変容です。一つ一つの行動において、自分だけでなく他者を意識する必要があります。すべての人々が地球市民としての責任を自覚することが重要なのです。さらに大切なことは、私たちがこの山を乗り越えた後に、どのような社会を勝ち取れるのかということです。近年、「自国第一」の主張が目立つようになりましたが、グローバル化はすでに後戻りできないところまで浸透しているのです。この世界全体を巻き込んだ感染症との戦いは、その先の社会をより良いものとするための糧となるはずで、その未来を夢、希望として抱きつつ、この新型コロナウイルス克服に挑んでいきましょう。

皆さんが入学した、東京大学は創立143年目を迎えました。この長い歴史の中でも今私たちは、大きな転換点に立っていると認識しています。

さて、東京大学が創設された明治時代の初頭、日本が直面していた深刻な課題の一つは国際社会との融和でした。ほぼ140年間の歴史の第1の70年は、長い鎖国が終わり、日本が世界と一気につながるなかで、国際社会で



卓越。 東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO Discover Excellence

総長

五神 真

認められる近代国家としての形を整え、それを担う人材を育成することから始まります。そして、第2の70年は、敗戦からの復興と平和で民主的な国家創設を掲げての再出発でした。東京大学もまた、戦前の帝国大学から新制大学へと、大きな転換を経験しました。

私たちは、今、第3の70年の入口に立っています。日本だけでなく、世界全体が再び大きく変わろうとしています。グローバル化とデジタル革新は、人類社会をかつてない形に向かわせていることは間違いありません。その中で、地球環境の問題や高齢化、さまざまな格差の拡大といった世界規模の課題は加速して深刻化しています。これらはどれも人類が過去に経験したことのないものです。教科書を探しても、その解決策は見当たりません。私たちの創造力が頼りです。すなわち、私たちが知恵を出しあい、新しい知恵を生みだすことが求められているのです。大学は、時間や空間の制約なく知を思うままに自由に追究し、議論することが許され守られている場です。この変化の激しい時代だからこそ、この大学の価値はいつそう重要なものとして際立ってきています。

皆さんは、この変化の時期に、東京大学でこれから新たな形で学びを始めることになりました。それはみなさん自身の人生にとつ

て、大きな転換点となるはずです。大学の未来と皆さんの人生、その両方の転換点を前に、東京大学が皆さんとともに目指す方向を確認したい。そんな思いで、ここでは、70年前の東京大学の再出発を振り返ってみたいと思います。

東京大学の第2の70年が始まった、第二次世界大戦終戦直後の東京では、多くの建物や土地が占領軍に接収されていました。東大の本郷キャンパスは、都心に近い場所に広大な土地を占め、空襲で破壊された建物も少なかったため、占領軍は進駐してきた直後から、このキャンパスに注目し、総司令部として利用する準備を進めていました。

結果的には、本郷キャンパスは接収を免れ、総指令部は日比谷の第一生命館に置かれました。これは、東大関係者による必死の努力によるものだったのです。その中心を担ったのは、当時の総長の内田祥三先生と、法学部長であった南原繁先生です。

内田先生と南原先生は、文部省とも協力し、占領軍の中核と直接接触し、説得を続けました。実は、戦時中にも、日本の軍部が東京大学の土地や施設の使用を求めたことがありました。しかし、断固受け入れませんでした。そのことを強調し、学問研究の場としてこれほどの施設を他に求めることはできない事情を説明します。そして何より戦後の日本の民主国家としての再建には、教育・文化・学問を中心に置いた国づくりが不可欠であり、とりわけ、東京大学のキャンパスにおける教育と研究の継続が、きわめて重要な意味をもつということを熱心に訴えました。そしてついに占領軍を説き伏せることに成功したのです。

平和を尊重し民主化を追求する新憲法のもとで、日本社会は根本的なシステム変革が求

められました。大学も例外ではありませんでした。1945年12月、内田総長のあとを継いで、南原繁先生は戦後最初の総長に就任しました。南原先生は、国が取り組んだ日本全体の教育制度改革にも、深く関わっていきます。新制大学制度と今でも呼ばれている改革は、旧制の中学や高等学校を含めた抜本的な改革でした。しかしそれは、教育制度をアメリカ風に合わせたという、にわか仕立てのものではありませんでした。南原先生は、戦争中の学生向けの挨拶ですでに、自分自身を深くかえりみる「人間的教養」や、個性を育てることのかけがえのなさを取りあげていました。きびしい戦時下にあっても、時代の運命に翻弄されず、本格的な学びを続ける。その営みがすなわち、一人一人の個性を磨くことになるという理想を学生に説いていたのです。この理想は南原先生が進めた戦後の大学制度改革に通じているのです。法学部長として、多くの学生の戦地への出征を見送った南原先生は、戦後の日本と大学の再生に、総長として大きな責任を感じていたのでしょう。

戦前の帝国大学は、限られたエリートの育成に主眼を置いていましたが、戦後の新制大学の要諦は、平等な教育機会の提供、民主化にありました。意欲と能力のある者ならば誰もが学ぶことができる教育システムの実現のために、多くの高等学校が作られ、国立大学は全都道府県に配置されることになりました。新制大学として東京大学が新入生を初めて迎えたのは1949年7月7日です。その入学式で南原総長は、「大学の再建」と題して、大学教育のあるべき姿を示し、創立以来の大改革に全学をあげて取り組むことを宣言しています。

目指すべき新制大学のもっとも重要な特徴は何だったのか。この式辞では、教養学部を独立した学部として新設し、「一般教養」のカリキュラムを導入したことだと述べています。現在、主に駒場の前期課程で行われている教養教育は、実はこのときに始まったものなのです。さて、ここで言う「教養」とは何を意味するのでしょうか。それは、単に知識をたくさん蓄えて物知りになるということや、心の飾り付けにとどまるものではないのだと、強調しています。そして、教養とは「科学の分断」や「人間性の分裂」をのりこえるためのものだと述べています。

戦前の大学教育が、細かく専門分化した学問の訓練に集中していた結果、そこで学んだ学生たちは、専門の知識は豊かでも、広い視野や長い歴史を見わたした、スケールの大きい判断力をもたないまま、社会で要職に就いてしまったのです。そのことが無謀な戦争への突入という悲劇をもたらしたのではないかと述べています。だからこそ、「一般教養」の学びを通じての人格の育成を、新たな大学教育の要として位置づけたのです。

南原先生が説くこの「教養」の理念は現代においても全く色あせていません。大学で学ぶということは、すぐにその場で役立つ技術や知識を教えてもらうことではありません。すでにある知識であれば、スマホやパソコンでインターネットにアクセスすれば、知ることができます。でも、それは単なる情報の検索であり、すでにある情報をコピーして増量しただけです。本当の学び、真の「教養」を獲得するとは、自分のそれまでの考え方を乗り越えていくことであり、それには自分とは異なる他者と交わる場が必要なのです。

そして今、グローバル化の進展とデジタル革新とも呼ばれる情報技術の急速な発展によって、社会はかつてない大きな変動のさなかにあります。この20年あまりの間に、ネット空間にはさまざまな情報がデジタルデータとして蓄積され続けています。そして人工知能技術などの進歩により、その膨大なデータを一気に解析する技術と、それを利用したサービスが次々生まれています。皆さんも、スマホを持ち歩いて情報を参照しながら、行動を決めているのではないのでしょうか。

インターネットで繋がれたサイバー空間の情報量は、とても全部を見渡すことはできないほどに膨大です。その中で人間の視野が、知らず知らずのうちに狭まってしまうことは、非常に危険な傾向です。自分と同じ意見ばかりを探しだし、考え方や感じ方が近い人々とのコミュニケーションに限定されてしまうのです。これは、異質な他者への感性や想像力を鈍らせます。かつて戦時中に南原先生が危惧したような、個性を失い、時代に翻弄されてしまう傾向が、そこではさらに深刻な形で復活することにもなりかねません。

だからこそ、今、大学では専門教育と並行

内田祥三

南原繁



しながら、多様な「教養」の学びを続けることが重要なのです。70年前の南原先生たちの理想は、現代においてまさにいっそう輝き、新たな形で生かすべきものだと、私は強く感じます。これは、さまざまな分野の学問的知識を交錯させることで、斬新なアイデアを発見するクリエイティブな思考力を、「教養」の学びの過程で鍛えるということを意味します。

それは、皆さんがこれまで受けてきた学校教育とは、全く異なるスタイルの学びになります。細かく定められた指導要領に沿って、あらかじめ用意された学習メニューをこなすという、これまでの学び方からの「ギアチェンジ」が必要です。東京大学はそのための多様な資源を豊富に備えています。激動の時代にそれを自由に活用できる機会を得た皆さんは大変幸運なのです。ぜひ、そうした可能性を自らの成長のチャンスとして引き寄せ、自分に適した形で最大限活用されることを強く願っています。

皆さんは、大学という場において、いろいろな高校、さまざまな地域や国から来た、異質な人々と出会うでしょう。教師との出会いも、そのうちの一つです。それは、友人関係とは異なっています。しかも、教える側にいる者も、何十年か前は、皆さんと同じ学生でした。同志としての精神の深いつながりもあり、先達としての反省や自分たちの経験から学んでほしいという気持ちも持っているのです。だから、先生方には遠慮せずに、どんどん質問してください。

さきほどお話しした教養学部の創設者の南原先生自身も、郷里の香川県から東京へ出てきて、旧制第一高校に学生として入学します。そのとき、校長であった新渡戸稲造先生の講話を聞いてうけた感銘を、のちのちまで語り続けていました。新渡戸先生は、何かを為さねばならないとさせる学生たちに対して、“Doing (何をするか)”の前に、“Being (どういう人であるか)”をしっかりと確立せよと、説かれたのだそうです。南原先生は、一高に入る前はほかの学生たちと同じく、社会に出て立身出世をめざすコースを、漠然とめざしていました。しかし新渡戸先生のこの言葉に出会って、「教養」を通じて自分の人格をしっかりと磨きあげることの重要性に気づか

れたのです。

南原先生の指導を受けた学者の中に、日本政治思想史の丸山眞男先生がいます。丸山先生にとっての教師、南原先生との出会いはこれとは対照的です。古典的な哲学に代表される「文化」の意義を強調する南原先生の講義を受けた丸山先生は、「何と言う観念的なたわごとか！」と反感を抱き、当初は批判者として接していたのだそうです。しかし、戦時中でも時代の流れに巻き込まれず、理性的な思考を毅然と保っていた南原先生の姿にふれ、やがて深い尊敬の感情を抱くようになっていきます。戦後日本の政治学の代表として活躍する丸山先生の成長の出発点には、そうした反発に始まる教師との出会いがあったのです。

大学での学びは、確立した知識を一方向的に受け取るだけではないのです。教員と学生とが、一つのテーマに関して対等に議論しながら、共に真理や事実を探究してゆくことこそが本質です。私自身も、これまでの物理学者としての研究人生の中で、学生との議論の中で気がつき、一気に見通しがついたという、経験が何度もあります。大学とは、そうした形で自分が変わり、教員と学生の間、また学生同士で学びあい、お互いを変えてゆく相互変容の場にほかなりません。

皆さんにもぜひ、東京大学を存分に活用しながら、さまざまな知識と出会い、ぶつかりあい、思考を深める、高いレベルの学びを経験してほしいと思います。そうした経験が、変化する時代を生き抜く力を培うのだと思います。

学部新生の皆さんには、高校までの受動的な学びの姿勢をリセットして、これからの自分の人生を何にかけるのかを探してほしいと思います。教養学部は、そうしたことを白紙の状態からじっくり考える絶好の機会であり、かけがえのない時間なのです。ここでいくつかアドバイスをしておきたいと思います。

日常では触れにくい現実と接し、国内だけでなく海外で世界を実感できるプログラムを東京大学ではたくさん用意しています。特に、学部新生の皆さんには、在学中に、最低一回はそれを体験することを勧めます。入口となる国際総合力認定制度Go Global Gatewayに、まず登録をして下さい。また、PEAK (Programs in English at Komaba) というコースの英語講義はPEAK生以外の学生の

受講も歓迎しています。グローバルに活躍する備えとして将来大いに役立つはずですが、これらを通して、世界を意識した広い視野から、自分の存在を見つめなおすきっかけをつかんで下さい。

進学選択が心配だ、とすでに感じている皆さんも多いと思います。しかし何より大事なことは、自分自身で未来像を描くことです。私自身は駒場の理科一類に入学した際に、進路ははっきり絞っていませんでした。当時六本木にあった研究所の原広司先生が開講する現代建築のゼミ、広松渉先生の哲学や教員免許取得のために受講した法学概論の講義など、その後私が選んだ専門とは随分違った講義ですが、今でもよく覚えています。それらの多様な学問に触れたことは、その後の人生に大変役立っていると感じています。サークル活動など課外の活動での出会いも貴重です。きっかけは忘れてしまいましたが、私は入学後2,3ヶ月してクラシックギターのサークルに出入りするようになりました。そしてそこで、出身地や専門や、考え方の異なる友人たちと出会いました。ギターの練習以上に、思い出すのは合宿などで寝起きを共にしながら、さまざまな議論をしたことです。仲間の進学先は法学部、文学部、医学部、理学部、工学部と多様で、その後進んだ道もそれぞれでしたが、卒業して40年を経た今も、互いに尊重しあい親しく交流しています。この学びと出会いは、私が駒場時代に得た人生の財産です。

ぜひさきほども触れた「ギアチェンジ」のチャンスを逃さないようにして下さい。手続きや制度などわからないことは、遠慮せずに問い合わせして下さい。さらに卒業するときには、自分が大学でどのような出会いを経験し、どんな志を抱くようになったのか、後輩たちに語ってほしいと思います。

大学院に入学された皆さんは、いよいよ本格的な研究を進めていくことになります。未来の東京大学の学問をつくりだすのは、皆さんです。皆さんが東京大学大学院において、仕事のできる研究者になるために活用できるプログラムや取り組みはたくさんあります。例えば、2016年には、学部や専攻の垣根を超えて、新しい研究領域を共通テーマでつなぐ輪をつくることをうながすために連携研究機構という仕組みをつくりました。現在まで

に既に33個の機構が走っています。また、世界トップクラスの研究者や知識人を招聘して、最高の学問を市民にも広く伝える東京カレッジという新たな場も走り出しました。そして、修士から博士課程にかけて皆さんをサポートする国際卓越大学院制度を導入しています。またダイキン工業の協力のもとで創設した東京大学グローバル・インターンシップ・プログラムは、グローバルな社会課題や世界のビジネスの最前線を体験する貴重な機会を提供しています。ぜひ、こういった東大が挑戦している新しい取り組みを積極的に利用して、想像力と柔軟性に富み、本質的な問いをたてられる「知のプロフェッショナル」に成長していただきたいと思っています。

今、人類は経験したことがない新型コロナウイルスとの戦いのさなかにいます。その中で皆さんの東京大学での新しい生活がスター

トしました。この入学式を含め、オンラインでの講義など研究や勉強は普通とは違った形にならざるを得ません。どのようにするのがベストなのか、処方箋は私たち教員にもありません。大切なことは、教職員、学生がそれぞれ知恵をしばり、創造的に一つ一つ行動していくことです。その際に、冒頭で述べたように、自分の行動が他者や社会にどのような影響を与えるかを常に考え、思いやりを忘れずに行動することが何より重要です。この戦いは、簡単には終わりません。しかし諦めてはいけません。感染症は必ず終息するのです。私たちは、皆さん全員に、学びの機会を途切れることなく提供していくことを約束致します。この困難と向かいあう経験は、この先の皆さんの人生にとってかけがえのない財産となり、学びの機会となると確信しています。ぜひ安心して、元気に取り組んで下さい。

さて、私の総長としての6年間の任期は今年度で最後になります。これまで総長として、研究・教育・社会連携・経営について、さまざまな改革を行ってきました。その成果は、統合報告書としてまとめています。ぜひ一度目を通してみてください。しかし何よりも大切なことは、皆さんご自身がこの改革の成果を活用し、一人一人、「知のプロフェッショナル」として育っていくことです。そして、大学での学び方・生き方を通じて、社会においてリーダーとして活躍できる力をつけていただきたいと思います。そうした地点にまで行き着くことで、東京大学の改革は初めて完成するものだと考えています。

皆さんには学生生活を、存分に楽しみながら学んでゆくこと、そして卒業後も活躍を続けられる力を養うことを、心から願い、お祝いの挨拶を結ぶことにいたします。

入学、おめでとうございます。

来賓祝辞

新型コロナウイルスの脅威の下、東京大学入学式は変則的な形をとることになりましたが、日本の誇るこの大学に入学を許された皆様方お一人お一人のこれからの4年間が実り豊かなものになることを心からお祈りします。皆様の入学に当たって挨拶できるというのは、私にとって大きな名誉であります。ここでの4年間は、東北地方の小さな町で生まれ育った私の人生を変えたともいえるものであります。

今、日本の大学は大きく変わろうとしています。スーパーグローバル大学創成支援事業に選ばれた大学は、東京大学を含み教育においても研究においても世界に開かれた、トップレベルの国際交流を行う努力を要請されています。東京大学も五神総長が掲げる大きな目標の下に進もうとしています。とはいえ、元気そのもののアジアの優秀な諸大学に比べて、日本の大学がとすれば、内向きになってしまうのが気になります。もしかしたら高校生の方が、就職を気にする大学生より、元気で意欲的かもしれないと思います。日本が独自の歴史や伝統、特色を保ちながらも、激化する国際競争の中で堂々と勝ち抜いていくことを私は期待しています。しかし「国際社会の中の日本」というものが果たすべき役割と覚悟が、今のままで十分でないという気が

してなりません。

私は1950年に東京大学に入学しました。新制大学に変わって2年目のことでした。大学にかける私の夢は、もっと知的に貪欲なものでした。駒場であるいは本郷で過ごした私の経験は、初めは大教室で聴いた有名教授の講義にちょっと失望したのですが、少しして、優れた多くの先生方の新鮮かつ刺激に富む話に触発されることが多く、のめり込んでいくようになりました。

私はやや生意気で、やたらに質問をする学生でした。第二次大戦中の画一的な教育に対する反発もあり、目まぐるしくスローガンが変わる戦後民主主義にも懐疑的な世代に属していました。そんな若者の一人として、自分では答えられない大きな疑問が心にうずいていたのを思い出します。

私は自分が専門にやりたい領域がなかなか見つからず、あれもこれも勉強してみたかったです。新設の教養学科に行ってみるしかないと考えました。しかし教養学科の中でも自分の研究領域を狭めることができないままに、大学院に進むことになり、結局フルブライト留学生に応募し、渡米することになりました。専門を限定出来なかったのは困りましたが、常に広がっていく領域には、たまらな



る卓越。 | 東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO | Disco Excell

公益財団法人国立京都国際会館 理事長・元 国際連合事務次長

明石 康さん

い知的好奇心をそえられるものがありました。学士論文はトマス・ジェファソンの政治思想を選び、英語で書きました。

関心をそえられるテーマは、アメリカ人学者が教えてくれた文化人類学もあり、「菊と刀」を書いたルース・ベネディクトの方法論を使って、日本社会を分析してみるなど、興味をそられました。この先生は自宅のお茶の会に毎週学生を招いてくれました。そこで会ったアメリカの若者たちとの活発な議論でやり込められた私は、悔しさのあまり、英字新聞の社説をいくつか暗記して、対抗しました。英語上達の秘訣は、議論でやり込められた時の悔しさだったと思い出しています。世

上にいわれる流暢な英会話を話すことより、文法や語彙や慣用句を土台として、論理的に話すことが肝心だと思っています。大学の卒業式は欠席するはめになりましたが、それは香港で開かれた国際ワークキャンプに参加するため、小さな貨物船で船酔いに悩まされながら東シナ海を渡ったせいでした。

1956年12月、戦後日本はやっと念願していた国連加盟が叶えられました。私はたまたま留学していた小さな大学院大学フレッチャースクールの見学旅行で、国連総会議場で展開された日本の加盟式典を自分の眼でみることができました。アジアを代表して日本の加盟を歓迎してくれたインド代表の暖かい言葉や、戦後日本にどの国よりも親近感を抱いたアメリカ代表による喜びの言葉の後、わが国を代表して話したのは重光外相でした。彼は訥々とした、しかし考え抜かれた英語で、国際連盟脱退以来、世界から孤立していたわが国が、やっと国際社会に復帰した率直な喜びと、これからの世界で念願の新しい国際協力の道を歩む決意を、堂々と述べました。

日本加盟のシーンを目撃した後で、旧知の国連事務局政務部長のジョーダン氏を表敬しました。私の発表をウィスコンシン州で聞いたことのある彼は、私に事務局の政務担当官として応募してみないかと勧めてくれました。いずれ日本に帰って教職につきたいと考えていたので、はじめはあまり興味を示さなかったのですが、ついに説得されました。その結果、重光演説から2カ月もたたないうちに、国連ビル35階に小さな部屋をもらって、仕事を始めることになりました。それがついに40年になってしまうとは、当時夢にも想像できなかったことでした。

国連事務局で与えられた最初の仕事は、前年1956年秋にソ連によるハンガリーへの軍事介入があり、そのため開催された緊急特別総会で、ソ連に対し厳しい批判が行われ、その真相を報告するようにとの事務総長への要請がありました。早速、報告書作成のためのチームが作られ、私も参加しました。政務部では、全く違う国々出身で、言語も教育制度も異なる職員たちが十数名集められ、約2か月間不眠不休で作成したその報告書は、国際的な評価に充分耐えられるものでした。バラバラの国々から集められた混成部隊が、よい報告書を作ることができたのは、国際公務員

制度に対する私の信頼を深めました。

ハンガリー事件とほぼ同じころ、エジプトによるスエズ運河国有化に始まる中東危機が発生し、イギリス、フランス、イスラエル三カ国によるエジプト侵略が起きたのに対し、アメリカ、ソ連、非同盟諸国による大きな反対がありました。ハマシヨルド事務総長とカナダのピアソン外相は、国連憲章に規定のない国連緊急軍の創設を総会に提案し、圧倒的支持のもとにそれが中東に派遣され、事態を正常化するのに大きな貢献をしました。その功績によってハマシヨルドとピアソンの二人は、ノーベル平和賞を授与されました。国連憲章に規定のない平和維持軍の創設は実に鮮やかなものでした。日本だったら、まず法律や憲法の規定があるかどうかについて、長い論争が起きたに違いないと考えられます。現実のニーズに基づき国際政局の難局に際し見事に対応した国連は、世界を驚かせることになりました。

1970年代になって、私は国連を退職し外務省入りをすることになり、日本政府国連代表部の一員として、国連予算や人事などを審議する第5委員会を担当することになりました。国連行財政に関する専門委員会にも選出されました。私は、分担金に関してかなり大きな額を支払う日本が国連で果たすべき役割を考えたり、より合理的な国連の政策決定のあり方がないだろうかなどと考えていました。国連の国際公務員制度と日本の国家公務員制度の両方を経験するのは、興味深いものでした。合理的でややドライな国際公務員制度と、日本的でやや情緒的でもある国内公務員制度の両方とも経験したおかげで、自分の仕事に多少厚みがついたのではないかと思います。

1979年に事務次長として、事務局に戻ることになりました。その後18年間に亘って、広報、軍縮、そしてカンボジアと旧ユーゴスラビア二つの平和維持活動をそれぞれ担当する事務総長特別代表をやり、最後に人道問題担当事務次長をやりました。仕事はそれぞれに興味深く、異なる課題に取り組むやりがいを感じるものでした。時間の関係で、カンボジアの平和構築に当たった経験と、同じPKOといっても全く異なる旧ユーゴスラビアの厳しい体験について、ごく短く触れます。

米ソが対立した冷戦時代がやっと終わり、安堵の息をついたポスト冷戦期の世界でした

が、国連がまず手がけたのは、約20年に亘って悲惨な国内紛争を経験したカンボジアにおけるPKOでした。第二世代PKOともいべき多層的な平和維持を行い、この国に平和と民主主義を樹立するという壮大なものでした。常任理事国以外では、日本、インドネシア、オーストラリアなどが熱心にそれを推進しました。これらの国々は、野心的な約二万二千人のPKOの支柱になりました。プトロス・ガリ氏が事務総長に就任するその前夜に、彼の泊まったホテルに呼ばれた私は、カンボジアでの特別代表の仕事を提案されたのです。晴天の霹靂でした。

カンボジアPKOを担当するに当たって一番心配したのは、カンボジアの世襲君主であり抜群の能力を持つシハヌーク殿下と国連代表の私の間に信頼関係が維持できるだろうかということでした。幸いにして殿下と私との関係は、全体としてきわめて良好に保たれました。

次に、カンボジアの主要な4政党と私との協力関係を保つことでした。心配したのは、ボル・ポト派、いわゆるクメール・ルージュが、一旦合意したことを取り下げ、ついには国連に対する非協力に変わったことでした。手を変え品を変えて説得に努めたのですが、私の説得にも拘らず、ボル・ポト派と国連との衝突事件を起こし、犠牲者も次々にでました。それでも1993年5月には国連による民主選挙が実施され、世界中のメディアがほとんど、国連による選挙がポト派の大攻勢によって悲惨な結末に終わることを予言していたにもかかわらず、現場の私たちは尽くせるだけの懸命な努力を続けたのです。平和を希求するカンボジア選挙民の実に約90%が当日、喜々として投票所に駆けつけてくれました。最悪に備えつつも、最善を尽くした甲斐があったといえるでしょう。

大成功できたカンボジアPKOの後、私を待っていたのは旧ユーゴスラビアにおける、さらに大規模な、平和維持というより平和強制ともいえる困難をきわめる活動でした。友人の多くは、「ユーゴスラビアPKOは民族や宗教の全く異なる三者の間の泥沼であり、おまが引き受けるべきではない絶望的な仕事だ」と忠告してくれました。しかし成功の可能性のある仕事だけに取り組むのは国際公務員らしくないと考えました。当事者の全部が賛成してくれる活動でないので、国連が本来

従事すべき平和維持とはいえないのですが、ブトス・ガリ事務総長との信頼関係もあり、多くの国々の支持もあったので、私は2年近くこれに取り組みました。

問題だったのは、アメリカがNATOによる空爆、空爆と言い続け、地上軍を全く派遣してくれないことでした。それに国内の三当事者間の関係は極めて険悪で危険に充ちていたのです。和解と和平への進捗はほとんど皆無でした。

抜本的な平和を樹立することは不可能でしたが、私は国連の代表として、68人の死者をだした1994年2月のサラエボ青空市場の悲劇の後と、同年4月のゴラジデ危機に際して、セルビア人勢力による総攻撃の後、停戦と兵力撤退を確保するため、NATO南部方面軍総司令官のアメリカ人ボーダ提督、セルビア政府のミロセビッチ大統領とそれぞれ深夜まで交渉し、セルビア人勢力との妥協を取り付けることができました。この二つの危機を、時間切れすれすれで解決に導くことができました。ガリ事務総長は一貫して、私のしぶとい交渉を支持してくれました。

結局問題の根本的解決のために、95年暮、アメリカとNATOによる介入が行われて、国連PKOは手を引くことになりました。

2000年8月、私の敬愛する国連体験豊かなアルジェリア元外相のブラヒミ氏による「ブラヒミ報告」が発表されました。その中で彼は、「国連には出来ることと出来ないことがある。国連は出来ることに専念して取り組むべきであるし、出来ないことに手を出すべきではない。安保理事会も予算や兵力を惜しむべきではないし、実行不可能な決議を採択し

てはならない。」という厳しい、しかし納得できる判断を下しました。カンボジアの成果と旧ユーゴスラビアの挫折の両方を経験した私にとっても、このバランスのとれたブラヒミ氏の紛争解決哲学は、諸手を挙げて賛成できるものです。その後、現在まで国連PKOは大体この線上を歩んできているということができましよう。

私たちは今、新型コロナウイルスというグローバルな試練に当面しています。この現象が求めているのは、世界が一緒になって対応できる効果的な取束ですが、現実の対応の仕方は国々のおかれた状況によってかなりまちまちになるでしょう。日本を世界から隔てるものは、やはり日本の伝統と制度の違いであるといえます。国際化が進んだとはいえ、外国人数がきわめて少ないこの国は、かなり異質的、ガラパゴス的な所があり、大学を含む高等教育の世界でも、それを頻繁に感じさせられます。

かつて60年代、70年代には世界を驚嘆させた日本経済でしたが、近年においては労働生産性がかなり低下しており、OECD諸国の中でも驚く低さであり、G7の中で最低であると聞きます。技能実習生という形でアジア諸国から労働力の慢性的不足を充足しているものの、より高度の移民を段階的に導入することによって、この国の活力を長期に亘って向上させる道を考えるべきではないかと思っています。

戦後世界において、アジアから欧米への留学生を出す点で、日本は先頭を切っていました。しかし今では、中国もインドも韓国も、日本をはるかに引き離しています。この現状

は残念なことです。高いレベルの研究論文の発表においても、日本からの論文提出はかなり少なくなっていると報道されています。

日本の英語教育もかなり問題を秘めているように思われます。英語は国際語であり、単なる一外国語ではないはずですが、にも拘わらず、その習得ぶりにおいて、問題がありすぎるようであります。同時通訳で知られていた村松増美氏は国連を訪れた際、「国連で一番使われている言語は何か」と私に聞いたら、「それはブローケン・イングリッシュです」と私が答えたとき、まことしやかに伝えられています。私が言ったのは、実は「それぞれの国の人々が訛りのある英語を堂々と使っている」ということだったのですが、おもしろおかしく潤色脚色されてきたようです。

エチオピアを訪問した際、私はアフリカでも傑出したメレス首相と国連改革の問題で一時間ほどみっちり話し、彼の完璧な問題の把握に舌を巻きました。ジャングルからでてきた革命軍の指導者とはとても思えない説得力でした。どの言語の場合でも、発音や流暢さよりも、論旨と正確さの方が大事ではないかと考えられます。日本人の身についた遠慮とはにかみは、よいものでもありますけれども、相互理解の邪魔をしている場合も多いのではないかと思います。

最後に、東京大学から、もっともっと世界を目指す人物が輩出され、その誰もが色々な国々に知己や友人をつくり、一緒になって世界の未来を創っていく日がやってくることを祈ってやみません。

教養学部長式辞 学部入学者の皆様へ

新入生の皆さん、そして新入生をこれまで支えてこられたご家族の皆様、東京大学へのご入学おめでとうございます。東京大学の教員として、新入生の皆様を最初に受け入れる教養学部の教職員を代表して、心よりお祝い申し上げます。

今年は新型コロナウイルス感染症の影響により、入学式が大幅に縮小されました。本来ですと両国国技館でこの式辞を皆さんにお伝えする予定でした。そのために原稿を用意していたのですが、残念なことに新型コロナウ

イルス感染症のために、すべて書き直しになってしまいました。

私は分子生物学を研究していますが、今世界を震撼させている新型コロナウイルスSARS-CoV-2は、いくつかのタンパク質と一本鎖のリボ核酸でできた小さな粒子に過ぎません。それ自身で増えることはできず、人間などの細胞に侵入し、その働きを利用してようやく増殖することができます。このようなちっぽけなウイルス粒子によって、今人類社会は大きな危機にさらされているのです。



ある卓越。  東京大学 
教養学部長

太田邦史

新型コロナウイルスによるパンデミックは、人と人との対面的接触などを利用して人から人に容易に感染し、増えていきます。まだ決定的な治療法やワクチンはできていません。そのため、感染拡大を防ぐために、世界各国で「social distancing (社会距離戦略)」という方法が取られています。この戦略は、人と人との物理的距離を増やしたり、行動を制限したり方法ですが、そのような中世さながらの方法しか、防御法がないのです。

社会的距離戦略は大きな副作用があります。人類社会は、人と人との接触や交流をベースに発展してきました。社会的距離戦略を実施するとその基盤を毀損してしまうわけですので、社会・経済・文化・教育など、あらゆる人間の活動がやりにくくなります。感染症対策を厳しくすればするほど、人と人との物理的な結びつきが弱められ、影響もより甚大になります。

教育も大きな影響を受ける人間活動の一つです。教養学部では、ガイダンスをはじめ、上級生や卒業生・東大校友会などと下級生の交流のプログラムを準備してきました。また、初年次ゼミやアドバンスト理科などの新しいタイプの授業や、国際研修・Go Global Gatewayなどの海外での学びなど、新入生の皆さんに向けたさまざまなプログラムを実施する予定でした。現在のところ、新型コロナウイルスの世界的拡大により、それらのプログラムの多くは中断したり、実施方法を再検討したりするなどの影響が出ています。対面授業は大学教育の基盤でもありますので、一刻も早くパンデミックが終息し、これらの活動を再開し、また皆さんと教室で顔を合わせた授業を始めたいと考えています。

しかしながら、新型コロナウイルスのために、皆さんへの教育を止めるわけには生きません。教養学部では今回、基本的に実習や体育実技を含む全授業をオンラインで提供することにしました。これは、東京大学はどのような状況においても、教育を可能な限り学生に届けたいと考えたからです。これからそのオンライン授業が始まるわけですが、教職員・

学生双方にとって東大始まって以来の大きな挑戦です。この危機は教職員の力だけで乗り越えることはできません。皆さんと一緒に工夫しながら良い授業を作り上げていきたいと考えています。

社会距離戦略を取ると、学生同士、あるいは学生と教員のコミュニケーションが取りにくくなると考えられます。しかし、中世ヨーロッパで猛威を振ったペストの時代とは異なり、ネットによるコミュニケーションが可能な時代です。ネットを介して人と人との関係性を深めていくことで、社会距離戦略の弊害がある程度軽減できるはず。地球上の生物の歴史を見ても、生物は多くのピンチをチャンスに変え、持続的に発展してきました。このピンチを是非チャンスに変え、テクノロジーを取り込んだ新しい交流の仕方を作っていきます。

しかし、ネット社会には良い面だけでなく、負の側面があることも忘れてはなりません。今回のパンデミックに限らず、ネット上にさまざまなデマやヘイト、扇動的な発言が流れ、それに伴う買い占めなどのパニックが起きています。このようなときこそ、自らの知識を総合して現状を理解し、多様な価値観を尊重しつつ、批判的に物事を分析する力、つまり教養が求められると思います。

教養を英語で表すと Liberal arts といいます。リベラルというのは「解放」とか「自由」という意味で、「人間を解放する学び」と捉えることができます。教養学部での学びというのは、この人間の解放を目指すものです。人類の知的活動を幅広く自ら学び、物事の本質を洞察するための普遍的な方法論や批判的な分析力、そしてそれらを活かして新たな領域に挑戦し、適切な問題を設定して解決にむけた決断のできる人材の育成を目指しています。つまり真の自由を得た人材の育成を願っているわけです。

何のために教養を身につけるのでしょうか。東京大学のロゴの横には「志ある卓越。」と書かれています。教養を身につける中で、と

ても重要なことがこの「高い志」を持つことです。教養学部を東京大学に創設した一人である矢内原忠雄第16代総長も、教養教育の目標の一つに「人格の陶冶」を挙げています。「I have a dream.」という説教で有名なマルチン・ルーサー・キング牧師は、差別やヘイトを乗り越え、アフリカ系アメリカ人の公民権獲得をもたらしました。キング牧師は、「教育の究極目標は知性+品格である」と述べました。

キング牧師はまた、「Darkness cannot drive out darkness; only light can do that. Hate cannot drive out hate; only love can do that.」(「暗闇は暗闇を追い払うことはできない。ただ光だけができる。ヘイトはヘイトを追い払うことはできない。ただ愛のみができる。)」と語っています。長年アフガニスタンで難民を救うために灌漑事業などに関わり、昨年銃弾に倒れた中村哲医師も、こう語っています。「私が学んだのは、高い理想で結び合うより、共通の敵を仕立て上げる結束の方が、はるかに容易だという人間の病理である。敵は、実は我々自身の心の中にある。強い者は暴力に頼らない。最終的に破局を救うのは、人間として共有できる希望を共にする努力と祈りであろう」

新型コロナウイルス感染症は、社会の成り立ちに不可欠な人と人との結びつきを弱めてしまいます。しかし、お互いに近づくことはできない苦境の中にある時だからこそ、私たちは希望と愛によって連帯する必要があるのではないのでしょうか。離れた場所からでも人を思いやったり、愛情を持って寄り添ったりすることはできます。皆さんにはこの厳しい状況の中で、そのことを学んで欲しいと思います。皆さんには本学での学びを通じ、多様な他者を尊重し、それぞれが志を抱いて人類社会の幸福のためにその持てる力を発揮し、活躍して頂きたいと思います。このような苦難の時代ですが、その苦難が皆さん方を一層磨き上げ、大きな志をもってこの人類社会に貢献できる人物に成長することを祈念いたしまして、私のお祝いのことばといたします。

研究科長式辞 大学院入学者の皆様へ

東京大学大学院に入学された諸君、ご入学おめでとうございます。また、これまで諸君を支えてこられたご家族や、関係者みなさ

まにも、心よりお祝い申し上げます。

新型コロナウイルスの影響で、本年度の大学院入学式は、ビデオメッセージという異例

の形になりました。新学期もオンライン講義などを活用して、安全性を確保しながらの教育・研究活動とせざるを得ません。また世界

中の経済活動は減退してきており、東京オリンピックの開催も、1年延期となってしまいました。しかし、世の中は悪いことばかりではないかもしれません。17世紀にアイザック・ニュートンが学位を取得した頃、ヨーロッパではベストが大流行して、ケンブリッジ大学も閉鎖されました。そのときニュートンは大学のキャンパスを離れて、故郷に戻りますが、じっくりと思索するなかで「微分積分学」、「光学、特にプリズム実験」、「万有引力」の着想に至ったとされています。今日は楽しい研究の話をししましょう。

さて諸君は、これから大学院という場で、学部で学んだことをもっと深く知りたい、先端的研究に挑戦してみようと、胸を躍らせていることと思います。大学院では、先人が築き上げてきた学理を究め、未だに誰にも解かれていない謎に挑むこととなりますが、自分の力で解いていくプロセスと、それが分かった時に、研究の醍醐味をきっと見いだすことと思います。研究は、未知の課題へのチャレンジと、それが解明できたときの喜びが、絶え間なく続く壮大な冒険です。

私は理学系研究科で、宇宙空間におけるプラズマの物理の研究をしています。太陽系や銀河系での、高温ガスや高エネルギーについて調べています。例えば、我々が肉眼でみる太陽は、約6000℃の光球と呼ばれる大気ですが、この熱源は1500万℃にも達する中心部分の熱核融合です。太陽の温度構造は、中心から光球へと外に行くにしたがって単調に減少しますが、光球の外側には、コロナと呼ばれる高温ガスの領域があり、再び100万℃まで上昇します。熱力学の法則により、熱は高温領域から低温領域にしか伝わらないのに、コロナの温度は、なぜか光球よりも100倍以上も高いのです。この不思議な現象は、宇宙の未解決問題の一つになっており、太陽にある磁場が大切だと考えられています。私はこのような高温ガスと磁場の物理を、宇宙や惑星を対象として研究しています。何か月もかけて考えて考え抜いて解明できた時は、それがたとえ些細な発見であっても、いつも嬉しくて胸が一杯になります。

大学院に入学される諸君も、このような研究の醍醐味を味わっていただけることと思いますが、実は研究は楽しいことばかりではありません。研究を進めると、予想とは違った

厄介な問題に突き当たることもあるでしょう。方針を少し変えてやり直しても、八方塞がりになって、時には落ち込んでしまうこともあるでしょう。研究は未知への挑戦ですので、予想通りに進まないことがあっても、不思議ではありません。しかし諸君の行く手を阻む壁に突き当たっても、教員や先輩・同僚たちも惜しみなく力を貸してくれるはずですよ。乗り越える壁が大きければ大きいほどタフな研究者になれるはずですよ。

私が研究に携わるようになって、大切だと思っていることが三つあります。「外の世界をよく見ること」、「他の人の意見や考えに耳を傾けること」、そして「自己主張をすること」です。三猿の叡智として知られる「見ざる、聞かざる、言わざる」という言葉があり、徳川家康を御祭神とした日光東照宮の三猿の彫刻を、ご覧になった方も多いかと思います。余計なことには関わるなという教えです。研究では、余計なことイコール真実でないことですが、その教訓と併せて、積極的に「見ること、聞くこと、言うこと」も大切だと思っています。面白いことに、埼玉県の秩父神社にも、「お元氣三猿」と呼ばれる彫刻があります。目を大きく開けて、耳を立てて、話しているところをモチーフにした、表情豊かな猿の彫刻ですが、この社殿も、徳川家康の命（言いつけ）によって建てられています。私は三十数年前に大学院で学位取得した後、すぐに渡米しNASAで研究を始めましたが、この「見る、聞く、言う」は、海外での研究生活を通して、強く意識するようになりました。

まずは「見る」ですが、自分の専門分野の、限られた範囲の研究だけをやっていけばいいのではなく、他の分野の研究も知識として知っておくことが大切です。そうすることで自分自身の研究の進め方や考え方にも深みと広がりが出てきます。蜻蛉壺的な研究では発展性が限られます。また昨今の研究では、デカルトの還元主義的な方法論が行き過ぎたところもあり、細分化および高度化された問題設定になりがちです。真に重要な根源的問題の解明のためには、個々のテーマが、全体像の中でどのような役割を担っているのかを見失わないように、常に自分の立ち位置を見ることも大切です。

次は「聞く」ことです。研究を進めるにあ



る卓越。  東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO 

理学系研究科長

星野真弘

たって、独自の考えを構築していくことが大切ですが、そのためには他の人の考え方や多様な意見に耳を傾けて、良いものは取り入れる柔軟性と吸収力が必要です。自分の属しているスクールとは異なる考え方をもっている人たちが、世界中に沢山います。真理はひとつであっても、理解の仕方は、いくつかあっても不思議ではありません。対立する考え方で、論争になることはよくありますが、相手の立場を理解し尊重することが、「真理」に迫る近道だと思います。

三つめは「言う」ことですが、研究成果をアピールすることができないと、せっかくの良い研究であっても、注目されることはありません。研究の世界では、ただ単に良い論文を出版して、国際会議で良い発表をするだけでは不十分です。自分の研究成果を発信する「アピール力」が必要です。先ほど対立する考え方や結果が出てきて大論争になっても、相手の意見を尊重することが大切だと言いましたが、相手の理解や解釈と比較して自分のほうが優れていると論理的に主張できる「ディベート力」も大切です。

ところで、現在人類は、いくつかの厄介で複雑な問題に直面しており、その解決のためには、プロフェッショナルな叡智を集結させることが必要になっています。科学は現代の生活を豊かにしてきましたが、一方でプラスチックごみの環境問題や地球温暖化などの地球規模の問題が次々出てきています。科学で発見された法則や原理をもとに応用された技術が、いまわれわれの生活を脅かそうとしています。この問題を解決するために我々が今どう行動するか

は、科学の問題でもあり社会や経済の問題でもありとても複雑です。我々一人一人が人類の繁栄のために、エネルギー政策や地球環境を、どのような価値判断をするかにも関わっています。この問題を先送りにして次世代に「つけ」を回すことはできません。科学的根拠に基づく方法論は、このような現代社会の問題を解消するためにも極めて重要です。身につけたものを総動員し、倫理観を持って、あらゆる人々と繋がり、多様な叡智を集結させることで、初めて解決に寄与できると思います。しっかりとした基礎知識や専門知識に加えて、幅広い視点

を持つことにより、これから諸君が学ぶ、真にプロフェッショナルな叡智を、社会の中で活用していくようにしてください。

最後に、諸君は society 5.0 という言葉を知っていますか。society 5.0 は、日本が提唱する未来社会のコンセプトです。「狩猟社会」にはじまって、「農耕社会」「工業社会」「情報社会」に続く、人類史上 5 番目の新しい社会が society 5.0 です。AI や IoT などによる、現実世界と仮想世界の高度な融合の下、様々な知識や情報を共有し、その活用により、今までにない新たな価値を生み出し、豊かな未来社会を目指そうとしてい

ます。五神総長の下、東京大学でも society 5.0 の実現をリードしようと、大学全体で取り組みが行われています。大学には、多種多様な知見が存在し、人材や技術も豊富です。しっかりとした専門知識とその叡智を学び、未来社会に貢献して頂きたいと思えます。諸君が、社会やアカデミアへと独り立ちされる日が来るのを楽しみに、私からの挨拶といたします。

入学生総代宣誓



文科一類

小林一也 さん

うらかな陽気が続く今日という佳き日に、令和二年の入学生として、栄えある東京大学の一員となれますことを、入学生一同、心より嬉しく思います。残念ながら国技館での挙行は中止となってしまったものの、多様な可能性を模索し、全面中止ではなく、オンラインでの配信という形でこのような式を挙げていただき、誠にありがとうございます。また、私たちがこの場所へと至るまでに必要不可欠な役割を果たしてくださった、家族を始めとするすべての方々に、この場をお借りして、改めて感謝を申し上げたいと思います。

さて、昨今、新型コロナウイルスの流行が深刻なものとなり、我々の日常生活から世界経済に至るまで、その影響は全世界的なものとなっています。同時に、地球温暖化などといった諸問題も、大きな課題として我々の前に立ちはだかっています。これらの問題は、周囲の環境に適応するのではなく、むしろ周囲の環境を自らに合うように恣意的に改変して生きてきた私たち人類に対する、非人間界からの警鐘という側面をも持つように感じます。

私たちは、これから東京大学で学ぶ学生として、これらの問題に立ち向かう力を身につけなければなりません。

東京大学には、私たちがこのような力を習得することを可能してくれる環境が整えられています。文系、理系という区分に囚われず、幅広い分野を学習することで、多角的かつ鋭敏な視座を養うことのできる前期課程と、各々の興味や適性に基づき、専門的知識を深める後期課程からなるカリキュラムは勿論のこと、五神総長を始めとする教職員の方々、また諸先輩方の温かいご指導や、同級生との切磋琢磨の中でこそ、社会の問題解決に自信を持って取り組む力を身につけることができると考えます。

未だ未熟ではありますが、伝統ある東京大学の構成員としての矜持を胸に、同時にあらゆることに対する謙虚な思いを忘れず、また、他者にために尽くすという至高の目的のもとで互いに共同することを通じて、一人一人が、社会において代替不可能な役割となるべく研鑽に励むことをここに誓い、新入生の挨拶とさせていただきます。

入学生総代宣誓



公共政策学教育部

尾崎雄太 さん

コロナウイルスとの戦いという非常事態の中で、東京大学においても、オンライン授業の実施など、種々の対策が取られています。感染拡大防止と健康維持に配慮を払いつつ、私たち新入生が支障なく新たな学びを始められるよう、準備を進めてくださったことに心より感謝申し上げます。止むを得ず入学式は中止となってしまいましたが、この場をお借りして、「学問と垣根」についてお話をさせて頂きたいと思えます。

私は学部時代に建築学科で学んできましたが、今春からは公共政策学教育部大学院に学びの場を移します。このような選択をしたのは、分野の垣根を超えた学びが重要であると考えからです。

そもそも、私が学んでいた建築学は、構造、材料、環境工学などの工学的側面、意匠などの芸術的側面、建築計画や法規などの社会的側面を持つ、複合的な分野です。同様に公共政策学も、東京大学公共政策大学院が、法政治学研究所と経済学研究所によって共同で設立されたことから分かるように、学際的な分野です。

なぜこのような分野が必要となったのでしょうか？

私たちはよく、文系や理系といった非常に単純化された分類の下、学問を語るがあります。しかし、実際の世界はより複雑で、簡単に線引きできるものではありません。

先人が蓄えた知を社会に還元していく上で、多方面から知を集結しなくては解決できない、複合的な課題に直面したことが、これらの学問分野の発展の背景にあるの

ではないでしょうか。

さて、今日グローバル化が急速に進行する一方で、世界を分断し、人種や特定の特徴を理由に人々を迫害する動きが各地で見られています。しかし、国境を超えた自由な人とモノの行き来が、新たな出会いや創造をもたらしてきたのも事実です。これは、学問分野の垣根を超えた協働によって、新しい知が得られたのと同じ構図でしょう。

私たちは、大学という独立した機関で、学問を究める自由を有しています。一方で、その自由を履き違えれば、自分の殻の中に閉じこもり、他者を排除する危険性すらはらんでいると言えます。

先人の積み上げた学知をさらに発展させ、その果実を社会に還元するためには、自らの殻を破り、多様性を受け入れる勇気が必要なのではないでしょうか。幸い、東京大学では様々なバックグラウンドを持つ人々が、日夜多彩な研究活動に励んでいます。この恵まれた学習環境を活かし、既存の垣根を超えて、学びを一層進化させることが、私たちの使命であると考えます。

よって私は本学新入生を代表して宣誓します。

先人の積み上げた学知に敬意を払い、学を志すものとしての矜持を常に忘れず、そのさらなる発展のために、あらゆる垣根を超えて真摯に学問に取り組むことをここに誓います。最後に、私自身が誠実さと謙虚さを忘れず、自らの研鑽をたやみなく改めて誓い、宣誓の言葉の結びといたします。



海と希望の学校 in 三陸

第7回

三陸を舞台に、岩手県大槌町にある大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターと、社会科学研究所とがタッグを組んで行う地域連携プロジェクト——海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域に希望を育む人材を育成するという文理融合型の取り組み——です。3年目を迎えたわれわれの活動や地域の取り組みなどを紹介します。

吉里吉里の塩蔵ワカメ

北川貴士

大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター
准教授

「お前はどこのワカメじゃ」

と尋ねられたら、「三陸産」と答えると7割の確率で当たります。鳴門も有名ですが、実は岩手県が収穫量日本一（平成28年）で、2位の宮城県とあわせて70%のシェアを誇ります。岩手の沿岸部ではほぼ全域でワカメ養殖が行われています。

日本人には大変なじみのあるワカメ。インスタント味噌汁にはたいてい入っていますし、灰干し、カットワカメ、ワカメスープ、ふりかけ、茎ワカメ、めかぶなど加工品はさまざま。調理法も多岐にわたります。しかし、収穫されたワカメがどのようにして加工品に仕上がるかについてはご存知の方はあまり多くないのではないのでしょうか。今回は塩蔵ワカメができるまでと地元中学校の取り組みについて紹介したいと思います。

大槌町・吉里吉里は岩手県でも特にワカメ養殖が盛んな地区です。小中一貫教育校・吉里吉里学園では、生徒・児童は毎年、総合的な学習の一環としてふるさとの産業や文化について学んでいます。中学部（金野節校長）では、地元の新おおつち漁業協同組合の協力のもとワカメに関する授業と体験学習に取り組んでおり、修学旅行を利用して東京で販売も行



(図1)

ワカメ刈り取り作業と塩もみ作業。収穫したワカメの加工は、大きな洗濯機のような機械「しおまる」(石村工業(株))を用いて行う。塩ゆでの様子はFacebook「海と希望の学校 in 三陸」で



っています。

毎年2～3月にワカメの刈り取りから袋詰め作業を行っています（今年はコロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、教職員・父兄による作業となりました）。刈り取られたワカメは港ですぐに塩ゆでにします。褐色の葉や茎が鮮やかな緑色に変化します。冷却後、メッシュ袋に詰め、大型洗濯機のような機械に入れて食塩水中で塩もみします（図1）。次に葉から茎などをはずします。私も体験させていただきましたが、これが大変。1本1本手作業で、根気よく丁寧に芯を抜かなければいけません。芯抜きが終わると、機械で圧力をかけて脱水します（図2）。脱水後、固まったワカメをほぐして小分けにして袋に詰め、シーリングして出来上がりです（図3）。



いかがですか。普段なにげなく食して

(図2)

芯抜きと脱水（20トンの圧力を断続的にかけます）。ドリンク缶1本分の脱水量の違いが価格に影響するそうです



(図3)

袋詰めされた塩蔵ワカメ



「海と希望の学校 in 三陸」動画を公開中→ YouTube サイトで「海と希望」と検索！

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）



部局長だより 第7回

～UTokyo 3.0 を導くリーダーたちの横顔～



情報理工学系研究科・情報学環編

「情報の底力」を広く示す20周年に

社会における情報の重要性は一段と増えています。ただ、情報を専門とする人が日本では非常に少ないのが現状です。情報を中心に据えた教育部局の長として、優秀な人材を輩出し情報社会をリードする使命の重さを痛感しています。

サイバー空間に飛び交う膨大な情報を適切に捌くことで、人と人、コンピュータと人を結ぶのが、情報科学です。情報はどう整理すれば伝わりやすいのか。情報の活用には適切な整理が肝であることを多くの人に知ってもらうことが重要です。情報はどの分野にも遍在しますから、情報を軸にすればあらゆる分野との連携が可能です。研究科内にこもらず、学内外の皆さんとの協働を強化していきます。その一例が産学連携体制の再編です。専任のコーディネーターが教育と研究の両面から企業とのマッチングを行う窓口「UMP-JUST」を新設しました。UMPはUnified Multiple Projectsの略。JUSTは技術系専門企業、金融などのユーザー系企業、スタートアップ企業、技術系総合企業を指しています。全学の産学連携部と連携しながらこの4月から活動を本格化させます。

具体的な検討はこれからですが、2021年で20周年を迎えるのを機に、研究科が生んできたものを広く周知する企画も実施します。多くの人に「情報の底力」を示したいですね。



情報理工学系研究科長
須田礼仁 趣味: クラシック

学環版FSIとして“FII”を進めています

学環では2018年度にFII (Future Information Initiative) を始めました。UTokyo FSIの情報版ともいべき枠組みを設け、Society 5.0に資する活動を組織的に行うものです。学環らしく様々なものを緩やかにつなげる形で、多様な活動を行っています。昨年10月発足のEdTech連携研究機構

では、教育にICT (情報通信技術) やAIを活用する取組みを推進。学環教員が代表の「ローカル5Gオープンラボ」では、東京都・NTT東日本との連携で自前の5Gネットワーク実験環境を構築し提供しています。また、昨年6月に高知県、10月には広島県、2月には宇部市と協定を締結し、一次産業のスマート化等に着手。地域の課題をICTで解決する試みを続けています。教育面では、医学系研究科と連携して2018年度に生物統計情報学コースを新設しました。エビデンス・ベースの医療に必須なのに日本では少ない医療統計の専門家を養成する当コースでは、2019年度末に初の修了生を送り出したところ。今後の展開が楽しみです。人間と遊びの関係を地域とともに考える「山中未来ファクトリー」プロジェクト、20回の歴史を持つ学生のメディアアート制作展など、情報と同様に重要な感性を鍛える取組みも継続しています。Society 5.0といえば情報学環、とお見知りおきください。



情報学環長
越塚登 趣味: テニス

UTokyo バリアフリー最前線!

第19回



熊谷晋一郎室長が
取材原稿で伝える
障害研究の現場⑥



気後れしないインクルーシブな 共創空間の条件

子ども時代は運動が苦手で泣き虫。快活な同級生たちに気後れしがちな自分は、生き馬の目を抜くような大人社会で生きていけるのだろうか、子ども心に不安だった。理科2類に入学後、人の心や脳に関心があり医学部保健学科(現・健康総合科学科)に進学。看護経験

医学系研究科
宮本有紀 准教授の巻



をもつ学士編入生に魅力を感じ、看護コースを選択した。看護実習では落ちこぼれ学生で、辛くて病棟実習に行けなくなることもあった。しかし4年の冬、看護管理実習で東大精神科病棟に行き、ロールモデルとなる師長と出会う。規範からの逸脱を厳しく評価するのではなく、何でもどんと来いという佇まいのその人は、悩みを抱え込まず、同僚にも自分の気持ちをオープンに話していた。「こういう場所なら、自分も働けるかもしれない」と思えた。

卒業後、修士課程で認知症の記憶に関する研究をし、語りを聞くことの面白さに気づく。精神科病棟での臨床を経て、精神看護学の博士課程に進学。調査先の東京武蔵野病院に魅力を感じ、博士課程終了後に看護師として就職、急性期病棟に配属された。最前線の医療者から多くを学ぶと同時に、望ましくない身体拘束や隔離さえ、いつの間にか当たり前の習慣になっている自分に戸惑いを覚えた。

その後、教員として東大に戻り、精神障害者自らが、仲間や支援者とともに、自分が望む生き方が何なのか、どうすれば実現できるのかについて取り組むセルフマネジメントを研究し始める。世界の先進的な取り組みに学び、当事者と専門家が知識や技術を一緒に作る「共同創造」の重要性に気づく。

専門家を前に当事者は、「知識も技術もない劣った自分はこの場にはいけない」と委縮しがちだ。それは、宮本氏自身が幼いころから味わってきた感情とも重なる。共同創造が単なるお題目にならないためには、専門家も自分の限界を開示し、参加者皆が「この場に居ていい」と感じられる空間を作るべく努力が必要だ。

所在ない講義や実習、発言しにくいと感じる会議は、大学の中にありふれている。多様な構成員が、誰ひとり置き去りにされず、自由闊達に意見を交わすことで新しい知識と技術を生み出すキャンパスを実現するためのヒントが、宮本氏の研究にはある。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第167回

RELAY COLUMN

人文社会系研究科・文学部 大学院係主任 **泉真沙子**

とある教務系職員の昼下がり



バイブル(?)である大学院便覧と一緒に

来年度の開講授業の入力作業中、ふと、作業の手を止め、声に振り返ると、久しぶりに窓口に姿を現したのは長期留学中の学生A。留学前、窓口で見た慌ただしい様子と打って変わって余裕のある明るい表情をみるに、留学は順調なようだ。留学奨学金の事務手続きを済ませ、颯爽と去っていく姿を見送りデスクに戻ると、非常勤の先生から教務システムについての問い合わせメールが来ている。手をつけていたエクセルの作業はしばらく終わりそうにない。B先生の英国土産の紅茶を片手に、先にメールの返信を書くことにしよう……。

——今年はいつになく落ち着かない4月を迎えている。一教務系職員として、一刻も早く、学生が安心して授業を受けられるようになるのが、海外で充実した留学生活を送れるようになるのが、そして、私にもこんな日常が戻ってくるのが待ち遠しいのである。

息子たちとの
(もふもふに癒やされる)休日



得意ワザ：魚さばきます

自分の性格：内弁慶の末っ子気質

次回執筆者のご指名：高橋みなみさん

次回執筆者との関係：研究推進部時代の前任後任

次回執筆者の紹介：癒し系の姉御肌

デジタル万華鏡

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

第11回

附属図書館情報サービス課
資料整備係長

中村美里

ピラネージは終わらない



↑ピラネージの肖像

→『想像による牢獄』扉



総合図書館には、^{これあき}亀井茲明(1861-1896、旧津和野藩主)が5年間のドイツ留学中に精力的に収集した、主に19世紀に刊行された美術工芸関連の資料群「亀井文庫」があります。この中の一つに、ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ(1720-1778)と彼の息子による銅版画集『ピラネージ版画集』(1835-1839刊行)があります。

この『ピラネージ版画集』は特別推進研究「象形文化の継承と創成に関する研究」(1999-2003年度)により全画像がインターネット上で公開されましたが、システム運用上の問題により数年前から公開を停止していました。その間、問合せや原本閲覧の申込みが総合図書館に寄せられていたことから、デジタルアーカイブ構築事業の一環としてデータベースを復活させることにしました。

といっても事は簡単ではありません。約15年前のデータベースの関係者を探す→担当者とコンタクトが取れ、データの所在確認→当時のハードディスクを入手→ソフトウェアのバージョンが古すぎ？ データが欠損？ なぜか巧く動作しない……→改めて別のデータ群を入手→画像とメタデータはレスキューできた！と試行錯誤をしながらサイトの再構築を進めました。また、旧データベースは地図からの画像選択など豊富なメニューを提供していましたが、機能の完全再現ではなく、画像とメタデータを早急に簡潔に公開することを最優先とする方針を決め、2019年9月にピラネージ版画集のリニューアルサイトを公開しました。現在は全29巻分の画像を見ることができます。

デジタルアーカイブの課題の一つは永続性の確保と言われますが、何らかの理由で休止したとしても画像とメタデータさえあれば復活は可能です(多分!)。その時代と状況にあった公開の仕方があるはずですので、休眠データに関するお困りごとがあればアーカイブ推進室にご相談ください。ノウハウを共有して、公開への道と一緒に探っていきましょう。

<https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/piranesi/page/home>

インタープリターズ・第152回 バイブル

カブリ数物連携宇宙研究機構教授
科学技術インタープリター養成部門 横山広美

非常時と科学コミュニケーション

コメディアン志村けんさんが新型コロナウイルスで亡くなったとニュースが入った月曜日にこの原稿を書いている。心よりご冥福をお祈りする。週末に外出自粛があったが、現在がどういう状況なのか、これからどうなるのか、どのくらいの期間続くのかななどの説明がなく不満と不安がたまっているところへのニュースであった。社会の動揺がニュースやSNSを通じて伝搬をしている。科学技術社会論や科学コミュニケーションの研究を行っている立場からなんとか少しでも貢献できないかと考え、3月28日に科学コミュニケーションの有志の会を発足させ活動を始めた。

科学と社会を扱う学問領域で、現在の状況は非常時の「クライシスコミュニケーション」が必要な時期である。政治と科学がきちんと連動し、誰から見ても合理的な判断が出されるのが望ましいが、日本の現状は海外に対応と比較してそうになっていない点があがゆい。この時期を過ぎるとリスクを扱う社会とのコミュニケーション「リスクコミュニケーション」が必要な時期がくる。たとえば低線量被ばく、ワクチン接種や牛海綿状脳症(BSE)の問題などがあげられる。リスクとベネフィットを個人が置かれた状況に応じて納得できる落ち着く点を見出していく。

最近の整理では科学コミュニケーションには①知識翻訳機能、②対話・調整機能、③共創のためのコーディネーション機能があるとされている。どれも単独でも大事な機能であり、どれかが欠けるとダメというわけではない。クライシスの時期であっても、①は科学コミュニケーションにできる重要な役割であるし、政策立案に必要な②③も、今回の場合は特にオンラインで貢献できるかもしれない。震災後、特に科学コミュニケーターの方々にとっては、リスクを扱うことに慣れず、専門も原子力や地震とは異なり、声を出すのが困難なほどの心理的圧迫という3つの壁「スキル・専門性・感情」の壁があった。しかし今回は、この壁を乗り越えながら、活動をしようと志を持ったメンバーが集まり活動を始めた。こうした「痛み」を伴う科学コミュニケーションの発展は、文科省の審議会でも議論が行われ期待をされている。

政策の現場、医療の現場で頑張っている方々を思うと頭が下がる。Kavli IPMUのメンバーも、数学と物理で見通しを立てようと貢献している。そう、いつもの学術の方法で貢献できることはきっとあるはずである。この原稿が公開されるころ、事態がさらに厳しくなっていないことを心から願いながら筆を置く。

科学技術インタープリター養成プログラム

蔵出し! 文書館

The University
of Tokyo
Archives



第25回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

東京大学で働く女性たちの足跡

東京大学の「女性初」というと、戦後の女子学生入学や、昭和45年に女性で初めて教授となり、後に東洋文化研究所所長を務めた中根千枝さんについて言及されることが多いですが、それ以前から東京大学で働いていた女性たちがいたことはご存知でしょうか？

東京大学創設以来、長らく女性が働く場所はおもに看護の領域でした。当館所蔵の『職員進退』(S0018)には、明治末以降に医科大学や伝染病研究所に勤めた看護婦長たちの人事記録が残されています。明治43年刊行の『医学部卒業記念写真帖』(F0025/S01/0003)では、手術を補助する女性たちの姿をみることができます。

大正時代に入ると社会的に女性の就労機会が広がり、事務職やタイピストの仕事につく女性が増えました。前述の『職員進退』をみていくと、東京大学では大正12年の関東大震災がひとつの契機となって、看護分野以外での女性の雇用が拡大したようです。

大正13年に附属図書館嘱託となった女性のなかに、ハワイオアフ島に生まれ、ハワイ高等女学校および現地の商業学校を卒業した経歴をもつ相良孝子さんがいます。附属図書館は関東大震災で全焼しましたが、すぐに復興運動が開始され、国内外から図書館の寄贈も受けて震災後わずか四年で蔵書数を55万冊まで回復させました。彼女の嘱託について「本学図書復興ニ関シ欧米諸大学ヲ初メ其他各方面ニ亘リ文書ノ往復頻繁ヲ極メ候ニ付」と記されていることから、米国での学歴を買われての採用だったと推測されます。



同年に附属図書館の他にも、会計課や史料編纂掛(現史料編纂所)で女性が採用されています。履歴書を見ると、女子大学を卒業していたり、東京帝国大学の聴講生であったりするひとが少なくなく、これらの雇用が高等教育を受けた女性の受け皿となっていたようにも思われます。彼女たちの多くは数年で退職していますが、教員以外の立場から大学運営に携わった女性たちの足跡がたしかに残されています。

(特任研究員・逢坂裕紀子)

東京大学文書館 www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features,Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
3月11日	生産技術研究所	野村政宏准教授が日本学術振興会賞を受賞
3月12日	教育学研究科・教育学部	グローバル・リーダー育成、欧州研修プログラム
3月12日～4月7日	本部広報課	広報誌「淡青」40号(オリバラ号)を発行しました 地に足がつく木と風のメインスタジアムを設計 / 隈研吾 人体の動きをより手軽に迅速に計測 / 中村仁彦 美しい義足は積層造形の技術で大量オーダーメイドの次元へ / 山中俊治 潮流分析でセーリング日本チームに追い風を / 早稲田卓爾 「淡青」40号「オリバラと東大。」
3月12日～4月2日	広報戦略本部、総合文化研究科・教養学部・薬学系研究科・薬学部、法学政治学研究科・法学部、新領域創成科学研究科	人が目を向けない中世の語彙研究で、フランス語文献研究の基礎を築く タンパク質分解を司るプロテアソームの研究から、未知の生命現象に迫る。 モンテスキューの研究が、未来を見渡す塔を築く。 人型ロボットから夢を得て、分散型ロボットの世界を拓く。 UTOKYO VOICES 077-079
3月17日	附属図書館	市河三喜、東条操などによる手書きの回覧雑誌「博物之友」を公開
3月17日	経済学研究科・経済学部	東京大学経済学部創立百周年記念講演会を開催
3月17日・27日	広報戦略本部、本部国際戦略課	東京フォーラム 2019 パラレルセッションレポート「サステナビリティへの道のり」[AI 革命が問いかけるもの]
3月19日	教育学研究科・教育学部	東京大学発アニメーション映像「海—いのちをめぐる旅」完成
3月23日・24日	本部総務課	令和元年度東京大学学位記授与式を挙行 令和元年度東京大学卒業式を挙行
3月26日	大学総合教育研究センター	「大学で教える」を学ぼう。東大FFP大学教育開発論 第15期受講者募集!
3月27日	社会連携本部	医学部附属病院南研究棟中庭の愛称が「オルクドールテラス」に
3月27日	本部経営戦略課	「Society 5.0 for SDGs」の実現に向けた経団連・東京大学・GPIFの共同研究に関する記者会見
3月27日	本部奨学厚生課	学生食堂における新型コロナウイルス感染症の拡大防止について
3月31日	本部広報課	広報センター臨時休館のお知らせ
3月31日	本部研究推進企画課	早稲田大学と連携・協力の推進に関する基本協定書締結
4月1日	本部広報課	令和2年 部局長交代のお知らせ
4月1日	本部広報課	新型コロナウイルス感染症の拡大を受けた「授業目的公衆送信補償金制度」の早期施行について(要請)
4月2日	総合文化研究科・教養学部	総合文化研究科・平岡秀一教授が日本化学会第37回学術賞を受賞
4月2日	本部広報課	3度目のダボス会議とGCSの構想 / 総長室だより第26回

新型コロナウイルス感染症対応に関する本学の発表まとめ(3月10日～4月8日)

10日 / 課外活動の自粛要請と課外活動施設の利用制限を発表。入学式式典の両国国技館での開催取りやめを発表。

16日 / COVID-19の特徴まとめを発表。18日 / 入学式式典の中止を発表。総長メッセージで、卒業式・学位記授与式の簡素化、学事届通りの授業実施、オンライン授業の推進、入学者へのメッセージのオンライン配信、学外者の入構制限などを発表。22日 / 感染者発生(教職員)を発表。24

日 / 家計が急変した学生への窓口を案内。25日 / オンライン授業・Web会議のポータルサイトを案内。26日 / 感染者発生(学生)を発表。課外活動と課外施設利用の中止を発表。27日 / 学生食堂の利用規制を発表。学生宿舎の入寮時期相談窓口を案内。31日 / 対面授業の当面中止を発表。入学科・授業料免除申請の郵送限定化を案内。1日 / 授業目的公衆送信補償金制度の早期施行要請を発表。2

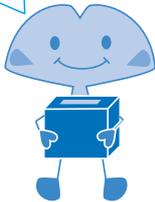
日 / オンライン授業への完全移行に際しての総長メッセージを発表。3日 / 6段階の活動制限指針(最大レベル4)を発表。6日 / 制限レベルを2に(最小限の研究関係者のみ入室可、入構時の身分証提示等)。感染者発生(教職員)を発表。学生の心理的相談の指針を発表。7日 / 制限レベルを3に(中止すると大きな損失を被る研究の関係者のみ入室可、入構時の記録義務等)。8日 / 五月祭の中止を発表。

昭和44年創刊

学内広報

に広告を掲載
しませんか

東大の教職員に全学の話題を届けて51年。通巻1532号の本誌が広告募集を始めました。1/8サイズ(65×84)、1/4サイズ(65×172)の2タイプをご用意。教職員約1.1万人へのPRに「学内広報」をご利用ください。問い合わせ：本部広報課(内線22031)



退任の挨拶 このたび退任された副理事の挨拶を掲載します。

大きな役割を持つ大学病院の発展を

前副理事 **塩崎英司**

国立大学における附属病院はかなり異質な存在で、東大においても同様です。建物の90%、医療機器の100%を自己収入で整備しなければならない反面、自己収入が拡大するなら人材・機器も投資的な配備が可能でありました。しかし、法人化に際しては多額の借入金を負った船出となり、東大病院も法人化直後694億円の借金を、単年度の病院収入274億円で返済していく中、文部科学省からの病院運営費交付金の時限的措置がなければ、としても支払えない状況にありました。法人化の翌年東大病院の経営担当管理職として

赴任し、再び事務部長・副理事として帰った期間を通算すると東大勤務は約10年近くになりました。この間、再開発時の一時的資金不足に対する本部からの支援には大変感謝致しております。支援の結果、今後14年間の財政改善の見込みもやっと立つようになりました。現在、病院収入は法人化直後の約2倍の500億円目前です。今後のコロナ対策にも大きく発展した東大病院が貢献することを確信し、東大が社会変革を駆動する存在として、一層発展される事を心よりお祈り致します。



CLOSE UP

早稲田大学と連携・協力推進の基本協定書を締結 (本部研究推進企画課)



3月30日、東京大学は早稲田大学と「連携・協力の推進に関する基本協定書」を締結しました。早稲田大学大隈会館で行われた調印式で五神総長は、「資本集約型社会」から「知識集約型社会」への転換が進む今こそ、大学の知をもとにした価値創出が求められていることを強調

しました。早稲田大学の田中総長は、知の最先端を研究・開発する東京大学と、社会実装力ある人材を輩出する早稲田大学とが連携して新たな知を創造していきたいと抱負を述べました。両大学は共同研究、人材養成、人材交流、研究施設・設備の相互利用の分野で連携を進めます。



CLOSE UP

南研究棟中庭の愛称が「オルクドールテラス」に (社会連携本部)



医学部附属病院南研究棟中庭のネーミングプランに、東海東京証券株式会社が協賛し、中庭の愛称について定める協定を締結しました。令和2年2月1日から令和7年1月31日まで、中庭の名称は「オルクドールテラス」になります。健康と医学の博物館、鉄門臨床講堂、院外薬局、

産学連携活動用のセミナー室、カフェ等のエンタランス機能も兼ねる開放的な空間の愛称となった「Orque d'or」は、東海東京証券のサービスブランド名で、フランス語で「金鱈」を意味する造語です。



CLOSE UP

部局長交代のお知らせ 4月1日付で部局長の交代がありました。

	新部局長	前部局長		新部局長	前部局長
大学院工学系研究科・工学部	染谷隆夫	大久保達也	大学院情報理工学系研究科	須田礼仁	石川正俊
大学院理学系研究科・理学部	星野真弘	武田洋幸	大学院公共政策学連携研究部・教育部	大橋弘	高原明生
大学院薬学系研究科・薬学部	船津高志	一條秀憲	東洋文化研究所	高橋昭雄	榎屋友子
大学院数理科学研究科	時弘哲治	河野俊文	宇宙線研究所	梶田隆章	(再任)



ナショナリズムについて

幸運なことにこれまで三つの全く異なる国で学究生活を送る機会に恵まれたが、その経験をもとに私がナショナリズムという概念をどう捉えているかを述べたいと思う。私はこれまでの人生のちょうど半分を米国カルフォルニア州で、もう半分を英国で過ごしたが、その間約40年にわたって何回か日本においても研究したり仕事を持つことがあった。そのようなわけで、どの国が一番好きかという質問をよく受けるが、私の答えは常にためらなく「日本」である。

ナショナリズムに相当する日本語の言葉は、今ではやや評判を落としている「愛国心」であろう。では、私は「日本の国を愛する者＝愛国者」なのだろうか。それは「愛」という単語の解釈に左右される。

ある場所や文化を分かち合い、その一員であることに喜びを見出すという意味でのナショナリズム（愛国心）、さらには自分が住んでいる場所や自分が生まれ育った、あるいは後に自分のものとして取り入れた文化を誇りに思う、そういった意味でのナショナリズムについては、何ら問題はない。ただし国の文

化と一言で言っても中身は複雑で、混在する様々なサブカルチャーのなかにはメインストリーム文化の先導を切るものもあれば、足を引っ張るものもあるわけだ。しかしながら、一旦国の文化が具象化され画一化されるようなことが起こり、標準として定義された国の文化を認める「我々」とそれを認めない「彼ら」との間に線引きがなされてしまうと、あちこちに問題が起こりだす。政治家の中には、このような方策が効果的で有用なことを理解して、機をみては策略を巡らす者がいるのも事実である。

日本が決して完璧ではないことは分かっているが、私は通常はあまり認められていない日本という国の多様性ゆえに日本を愛している。この多様性を大切にしながら建設的な取り組みを続けていくためには、国を愛しているということが根底になければならないと思う。

バブ・ジェームズ
(社会科学研究所)

